
Love begins with Internet

砂沙さらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o v e b e g i n s w i t h I n t e r n e t

【Nコード】

N 1 2 5 3 A

【作者名】

砂沙さらら

【あらすじ】

メルマガをきっかけに有り得ないはずの出会い。そして彼女に引かれて行く僕。リストカッターと鬱病みの二人が偶然の出会いから恋に落ちそして…

春の始まり（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

春の始まり

右手。あたしの右手はカッターを握るためにあるのかな？

夜になると あたしの右手はカッターを左腕に押し付けて、そして
ゆっくり引く。

血が流れると安心する。あたしの血はまだ紅い。

あたしはまだ人間だ。

そうやって毎日確かめていないと不安。

午前1時過ぎに届いたメルマガ。

僕は何故こんなマガジンを選んだのだろう。 リストカッターの見
ず知らずの女の娘。

ネットで彼女の言葉に何か魅かれるものを感じて購読し始めたのだ。
でも何故魅かれたの

か分からない。

ただ僕は彼女の人生を覗いてみたかった。

あまり褒められた趣味ではない。

送られる内容は大概、自分を蔑む言葉の羅

列や独り言。

読めば僕も気持ちが悪入る。しかし読んでしまふ。時々、通院時の
模様が報告されること

もある。どんな薬が出たとか何を医者が言ったとかだ。

多分僕は彼女が僕の気持ちを代弁している様に感じているのだ。
出来ることなら彼女に会いたい。話をしてみたいと思う。

無論、無理なことは分かっているのだ。

ネットの世界は地球中に繋がれているのだ。日本人かどうかさえ分

からない。ただ日本語で書かれているだけだ。

僕は眠るのを諦めて車に向かった。行き先はいつものBARだ。酒は絶対ウイスキーかブラン

ディだ。人生を考えるには、ビールじゃ思考が進まない。店に着くとバーテンダーのネコ

が愛想よくいらっしやいませと言い、僕のボトルを出した。「ようネコ元気そうだな」

「当然っす。客商売は元気でなきゃ」そう言いながらロックグラスを差し出す。僕はそれ

を受取り窓際の席に腰を下ろすグラスを口に運びながら、携帯で彼女のマガジンの続きを読む。

自分の存在が希薄になって行く。無意味になって行くのが怖い。

同感だ。

でもあたしが、あたしについて考えるとそうなって行くとは思えない。

誰かに守って欲しいと思う時がある。それが凄く嫌。守ってもらった価値なんて無い。

あたしは何もしてない。何も生み出さない。

空気を吸うだけ。

どうしてこんな風になっちゃったのかな？

あたしはずっと幸せだった。パパもママも優しくてそして厳しかった。とても愛してくれた。

なのになんで？なんであたしはこうなっちゃったの？

蚯蚓腫れのように左腕の無数の傷跡。

切りたいわけじゃないの。でもきらずに居られない。誰かたすけて
いえ自分を助けなさいあたし。

出来ないよ。辛い。今夜も薬漬け。byエリス

「ふう」

僕だって何も産み出さない。消費するだけ。消耗するだけの毎日。
彼女の言葉は僕の心の底をサルベージする。

彼女の言葉が繰り返し僕の頭を巡る。どうやら今夜も眠れそうに無
い。

2杯目のロックを飲み干すと僕は深いため息をついた。

同じことを考える人も居るものなんだな。奇妙な実感が体を走る。

僕もメルマガを書いてみようか。同感してくれる人が幾らかでも居
るかもしれない。

彼女の発行サイトを調べて見た。同じ所でやってみよう。

そう決心して今夜の人生回顧は終わりにした。

「ネコ、ごっそさん」

「毎度」

僕は車に戻りシートから星を眺めた。夜は限りなく深まって行く。
淡く淡く。

僕のメルマガ（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

僕のメルマガ

メルマガ配信サイトの注意書きと規則を読んで、登録。
審査が完了してよいよ配信開始。

はじめましてダニエルです。第一回配信です宜しく願います。
僕は今或るメルマガに触発されて発行を決意しました。
主にそのメルマガを読んだ感想などを書いていこうと思います。
テーマは人生について。

とは言っても宗教や哲学の話では有りませんのでご安心を。
ではそのメルマガの紹介をしておきます。

エリスさん発行「あたしは人間？」です。

彼女の言葉に同感したのは

「自分の存在が希薄になって行くのが怖い」

「あたしは何も生み出さない。空気を吸うだけ」

こんな悩みを抱えている人が僕のほかにも居たのですね。

あなたはどうですか？
ではまた。

初めてなのであまり上手く書けない。まあしかし最初はこんなもの
だろう。

さて、つづいては僕のことも書いて行かなければならない。僕も鬱
病で二年通院している。

冬以外は比較的元気だが寒い季節は鬱が重くなってどうもだめだ。

二回配信はそのあたりを書いておこう。卑屈にならないように。

それと友人の一人も最近会社で倒れてしまい僕の勧めで通院してい
る。

彼と良く人生の話をする。そう言った事も書いていこうか。

早速テストとして自分のメアドで購読登録してみた。

ちゃんと配信されているようだ。

まずまずの滑り出しだ。後は読んでもらえるようにしなければなら
ない。

いつも仲間の集まる掲示板に書きこんでいた。

「メルマガ始めてみました。テーマは人生。と言っても難しくない
ですよ。」

僕が書くんですから。良かったら購読してみてください。宜しくお
願いします。」

こうして僕のネットライフに新しいコンテンツが加わった。

彼女の夜（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

彼女の夜

朝……だ

眩しすぎる

見たくなかった

いらなかったのに…

昨夜

「オマエナカ死ネバイイサ」

幻聴

はつきりと
くつきりと

聞こえた

リスカに
プチOD

眠れなくて
眠れなくて
眠れなくて
眠れなくて

眠剤は効かないし
腕はもうボロボロだし

夜中
色んな心優しい人から
メールが来たから
こまめに
こめめに

メールして
メールして
メールして
メールして

……

ひどい内容

無様……

そして

メールをした行為

それ以外の記憶

喪失……

自殺願望絶頂……

約束恣意的破棄…

嘘付…

裏切女…

なにをやっているんだよ
なにをやっているんだよ
なにをやっているんだよ

あたしは

なにを

やってるんだよ…

昨夜

誰の励ましも

誰の言葉も
誰の心も

あたしには

聞こえなかった…

ねえ

もう一人のあたしが
やった仕業でも

このあたしの
責任…

なんだよねえ

どうすればいいの
手に負えないよ

あたしじゃないのに
あたしじゃないのに
あたしじゃないのに
あたしじゃないのに
あたしじゃないのに

あたしなんだよ…

迷惑をかけた皆様
ゴメンナサイ
心配してくれた皆様
ゴメンナサイ

朝陽…

眩しすぎる朝陽…

見たくなかったな…

byエリス

朝起きると彼女のマガジンが届いていた。
何だろうこの胸が絞めつけられる感覚は。あまりに切実で何度も何
度も読み返してしまう。
僕は手首を切ったりしない。リスカットはほとんどが女性だ。
そして男性は自殺者が多いという。

確かに僕も死のうとした。でも死ねなかった。

今は死ぬことを諦めている。ただ、其の時 が来るのを待つだけだ。
僕がNETに繋ぐのはホームページやウェブログを通じて誰かに解
かって欲しいからだ。

それに自己表現の場所でもある。そんな思いでNETする人間は僕
だけではないはずだ。

或いは、助けを求めている人だっ て居るかもしれない。

そんなことを考えながら僕は部屋を出て鍵をかける。

眠っていないが仕事の時間だ。働けるときは働いておきたい。もち
ろん不眠で仕事をするのは非効率だ。

だがしないよりマシだ。僕は車を走らせガソリンスタンドへ寄って
給油し、その間にセブン・イレブンで買った

サラダサンドをかじり微糖の缶コーヒーを飲んだ。

再び車に乗り込むと僕は両手で左右の頬をパシパシ叩いた。

別に意味など無い。ただの癖だ。スイッチを切り替えるための。

そして僕が僕のために用意した戦場へ向かって車を走らせた。

春のうらかな陽光は既に世界に満ちていた。道路脇には白や紅い花を咲かせたつつじが並んでいた。

カーラジオからはA B B Aのダンシング・クイーンが流れ始めDJの野太い声は消えた。

僕はまだ、彼女の昨日の夜のことを考えていた。

彼女の夜（後書き）

http://plaza.rakuten.co.jp/24j
ihatujit yaku/
24時着0時発……
管理人MISS・Mさんの協力により執筆しました。

比処にいないアナタへ（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

比処にいないアナタへ

第二回配信は少し趣向を変えて見ました。
先ず彼女の詩をお読みください

「オマエナンカ死ネバイイサ」

（ここで前述の詩が入るわけだが、割愛する）

10年くらい前、僕はシンセサイザーユニットで歌と作詞を担当した事があります。
その頃書いた詞を今回はお届けします。

「比処にいないアナタへ」

喜びを運ぶ 光になりたい。ずーと君を笑顔にしたいから。
悲しみを流す 雨になりたい。君の涙を隠したいから。
喧騒消し去る 闇になりたい。いつも疲れて欲しくないから。
君の踏みしめる 道になりたい。明日に迷って欲しくないから。

僕に出来ることは無い 今は
君の心に少し遠いから。

僕に出来ることは無い 今は
バット ハウ ワンダフル ライフ イズ ホワイル ユー アン
ド ワールド

（しかし何て素晴らしいんだろっ君とこの世界に生きられるなんて。）

思い出を詰める 小瓶になりたい ずーと君を支えるはずだから
君の胸焦がす 炎になりたい ずーと僕を 感じて欲しいから

僕に出来ることは無い 今は

君の心に少し遠いから

僕に出来ることがたった ひとつ

詩^{うた}よ届け君へ マイ デイアーハート

この詞がもしも彼女に届いたなら。彼女の支えにならないだろうか？
そんなことを思うダニエルです。ではまた。あ、因みにハンドルネ
ームのダニエルの由来は僕の好きなウイスキーのジャック・ダニエ
ルから取りました。安易ですよね。創造性の無さが現れてしまいま
した。

下弦の月（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

下弦の月

静かな山間の道を車が走っている。深夜1時過ぎ。ドライバーは女性だ。

幾つものカーブを丁寧に抜けて山道を上って行く。もう40分上っただろうか？

見とおしの悪い左カーブ。不意に目の前が眩しくなる。大きな光の縄がその車の前に飛び出す。

サイレンの音が響いている。やけに大きく。まるで耳元で鳴っているみたいだ。

僕は突然目を覚ました。

サイレンはまだ鳴り止まない。そこが自分のベッドの上であることを確認し、僕は今の情景が夢であったことを知る。

サイレンは窓の外で鳴っていた。ブラインドを上げると救急車が近づいて来るのが見えた。

そして通り過ぎて行った。

やれやれ、サイレンのせいであんな夢を見たらしい。

それにしても見たことも無い女性だった。僕が今まで知り合った誰でもなく、そして誰にも似ていなかった。一体誰だ？

まあ夢の中のことだ。誰と知れない人物が出てきてもおかしくはない。

枕もとの携帯電話を取る。3：17。

メールが入っていた。

彼女のマガジンだった。

アタシハ ヒトゴロシ。

あたしは彼を殺した。

あたしはヒトゴロシなんです。

あの夜。

3年前のあの夜。

あたしは彼を殺したんです。

彼のところへ行って

早く行って謝らなくちゃ。

こんなものじゃ足りない。

こんなものじゃ足りない。

足りない足りない。

足りない足りない。

足りない足りない。

足りない足りない。

左手から流れる血の量。

こんなじゃ行けない。
彼のところに行けない。

もっと海のように流れなきゃ

あたしは何で生きているんだろう。

もういいよ
もういいのに

アタシ マダ イキテル。
マダ イキテル ツモリナノ？

アナタはありがとうって言ったんだってね
アタシの上に覆い被さって

ハンドルと膝の間に挟まって。
ずっと呟いていたんだよね。

アリガトウ

それがアナタの

サイゴノ コトバ

by エリス

僕はタバコに火をつけた。
窓を空け唇から亜麻色の月に向かって、紫色の煙を吹き掛けた。
それからもう一度携帯のスクリーンに目を向け彼女のマガジンを読

み返した。

もう眠気はさつさと僕を見捨てて出て行ってしまった。

今更、眠剤を飲んだところで眠れはしない。僕はタバコを啜えたまま車に向かった。

ロング・グッドバイ。

いつもの店の前に車を止めエレベーターで7Fに上がり檜の気の重い扉を押す。

カランカラン とドアについたカウベルがなりいつものようにネコが愛想良く振り向く。

「また眠れないんすか？」

「今まで寝ていたよ」

「起きてきたの？わざわざ？」

「目が覚めただけさ」

「もうダニエルないよ、どうします？」

「ラストイーネール」

「少々お待ちくださいませ」

そういつてロツク・グラスに球形の氷を落とし、フェーマス・グラスとドランブイを注ぎステアする。50秒ほどでグラスは僕の前に置かれた。

「夢見でも悪かったんすか？」

「いつになく鋭いね」

「まゝたそういうこと言う」

「俺はプロですからね。お客様の顔色くらい読めなくてどうするんですかぁ」

「悪かったよ」

そう言つて僕はグラスを取り窓際のいつもの席に座る。

下弦の月がくつきりと団地の屋上すれすれに引っかかっている。

どういうことだ？あんな夢を見た後に今度はこんな内容のメール。

僕は決して勘の良いほうではない。それにここ何年か夢も見ることが無かった。

まるで彼女が見せた夢のようだった。僕は彼女の言葉とあの夢とを、交互に思い出しながら月が夜明けに飲み込まれその色を失うまで一人で空を眺め。3杯のグラスを空にした。

店を出ると春風が並木道の若葉を静かにそよがせ始めていた。

想い（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

想
い

あたしは幸せになんかなっ ちゃいけない！！
あたしは幸せになんかなっ ちゃいけない！！
あたしは幸せになんかなっ ちゃいけない！！

いけないんだよ！！

だって…

アタシハ、ヒトゴロシ。

アタシハ、ヒトゴロシダカラ…。

あたしは人を殺したの

あたしは彼を殺したの

あたしはそう…

彼をこの手で…

殺したの

だから

謝りたいの

謝らなきゃならないの

彼の処へ行つて…

謝りたいの

謝らなきゃならないの

早く彼に会つて…

急いでるの

邪魔しないで！

こんなんじゃ足りない
こんなんじゃ足りない

もっと出て

早く出て

出てよ！！

出てよ！！

出てよっ！！

でなきゃ

彼がいなくなっちゃう…

こんなんじゃ足りない

こんなんじゃ足りない

真っ紅な

真っ紅な

血の海が出来なきゃ

あたしは

彼の処へ行けないの…

あたしは

彼の元まで辿り着けない…

これじゃ足りない
これじゃ行けない

全然足りない
全然逝けない

早く…!!
早く…!!

出てよ!!!!!!

あたしは
生きてちゃいけないの

あたしが
生きてていい筈がないの

なのに

それなのに

どうして

どうして

どうしてなの…

アタシ マダ イキテル。

アタシ マダ イキテルノ？

アナタは最期に

ありがとうって言ったんだってね

あたしの上に被さって

ありがとうって言ったんだってね

どうして
これが

どうして
これが

アリガトウ
…

アナタの最期の言葉なの

アナタノ

サイゴノ

コトバ…ナノ

by エリス

帰る道すら。またマガジンが来ていた。

僕の胸は困惑で一杯になった。彼女のことが頭から離れない。

今までこんなことは経験が無かった。何だろう？

この想いは。

僕は彼女に会いたいと思っていた。

それは好奇心の枠を出なかった。

しかしこの胸のざわめきは一体何なのだ？

いつからだろう。一体いつからだ？

あの夢に出てきた女性は彼女なのだろうか。いや彼女の幻影と言っべきか。

大体僕はメールの文面以上の彼女を知らない。彼女の顔や体つきなど知りもしない。

分かるわけが無い。

僕は自分の中に彼女の幻影を作り出したに違いない。

僕の勝手な妄想なのだ。

妄想の相手に胸をざわめかせているのだ。

その時だった。車を赤信号で止めた瞬間だった。

夢で見たあの女性が僕の目の前にいたのだ。

嘘だ。有り得ない。

有るはずが無い。この街に彼女がいるなどと。

僕の頭はどうかしてしまっただ。そうに決まっている。

だが僕の体は僕の意識を離れた行動を取っていた。

車を降りその女性に向かって歩いていた。

気がつくと僕はその女性の前に立ちふさがっていた。

女性はキョトンとした表情をしている。

仕方が無い。

僕は勇気を振り絞って声をかけた。

「あの、失礼ですが人を探しているんです。貴方はエリスさんじゃありませんか？」

「は？」

女性は先程の表情を更に深めていた。

「失礼しました。あまりにもイメージが似ていたもので」
僕は非礼を詫びた。

すると

「今、エリスとおっしゃいましたか？」

「ええ」僕は答えた。

「エリスって本名ですか？」彼女は言った。

「いえ、NET上のハンドル・ネームです。その人を探しているんです」

「エリスにイメージが似ていると、そうおっしゃいましたよね？」

「はい」

「ご存知なんですか？エリスを」

「あ、いえ、その、話せば長くなるんですが・・・」

クラクションが鳴る。信号が青に変わっていた。

「少し待っていただけますか？車を移動しますので」

そう言っただけで僕は急いで車を左の路肩に移動させ、改めて彼女の前に立った。

「申し訳ありませんでした。正確にはエリスさんを僕は知りませんが、その、お信じになれないと思いますが、夢に出てきたんです」

「は？ 夢？」

「ええ、正直に申し上げているんです。突拍子も無いことは十分承知していますが。事実なんです」

彼女の表情がより一層、困惑の色を帯びている。

無理も無い。しかし彼女はエリスという名に心当たりが有ることは確かかなようだった。

「貴方はエリスさんをご存知なんですね？」僕は念を押した。

ここまで話して僕はやっと落ち着いて彼女を見ることが出来た。

そして彼女の左腕を見た。

昨日と今日は春と言うより初夏の気温だった。

朝とは言え長袖のトレーナーシャツの僕は既に汗をかいていた。見れば彼女は半袖で、美しい腕がそこからスラリと伸びていた。何処にも傷跡など無かった。エリスでは無いことは一目瞭然だった。

「いや、大変失礼しました。人違いでした」

僕はなにをやっているのだ？

有り得ないことは分かっていたじゃないか。

休日の朝、これから出かけようという時に訳のわからない男に呼び止められて、不躰な質問をされた彼女こそ災難だ。

「突然、不躰で本当に申し訳ありませんでした。お詫びします。どうか許して下さい」

僕は直角にお辞儀をしてその場を離れた。

想い（後書き）

http://plaza.rakuten.co.jp/24j
ihatujit yaku/
24時着0時発...
管理人MISS・Mさんの協力により執筆しました。

アヤメ(前書き)

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

アヤメ

「ちょっと待って下さい」

彼女は立ち去ろうとする僕を呼び止めた。

「何故私がその人。エリスって人じゃないと分かるんですか？」

「彼女の腕は多分貴方みたいに奇麗じゃないはずですから」

「エリスさんは腕に傷を負ってるはずなんです。多分たくさん傷跡を」

僕は続けた。

「やはり貴方はエリスさんをご存知なんですね？　こんなメールを書いている人なんです」

そう言ってから僕は携帯電話をポケットから取り出し、エリスのメールマガジンを見せた。

彼女は一読して頷くと。

「知ってます。このメールを書いた人」

自分から声を掛けておきながら、今度は僕の方が些か驚いてしまった。

「そうですか」

「僕は彼女を探しているんです」

「何のために？」

彼女はさっきより表情を幾分和らげて訊ねた。

「はい。言ってみれば好奇心なんです。変な意味じゃなくて、彼女と話をしてみたいと思って」

僕は自分の言葉が嘘ではないだろうかと思いつながら、そう答えた。

「彼女と話したい」

そう言っていると彼女（つまりは僕が声を掛けた彼女のことだ）は僕をまじまじと眺めた。

まるでスーパーマーケットで特売のレタスの品定めをするみたいに。

「悪い人ではなさそうね」

僕の何処を見て彼女がそう思ったのか不思議だった。

伸ばしっぱなしの髪の毛を無理やりオールバックにし、不精髭を生やし、ヨレヨレの色の褪せかけた紺白のボーダーのトレーナーシャツに、これもヨレヨレのチノパンツ。

おまけに踵をつぶしたテニスシューズ。

好印象を与える材料は僕自信ですら思いつかなかった。

それでも彼女は僕を悪人ではないと判断した。有り難いことだった。もつともマトモな人間とも思わなかっただろうけれど。

「失礼ですが彼女のお友達ですか？」

僕は訊いてみた。

「どうしてそう思うの？」

「他に思いつかないからです。知っているとおっしゃったもので」

「そう。それならアナタは私に何か頼みたいのじゃないかしら？」

「もしそう出来るのであれば」

「まあいいわ。ただ今は時間が無いの。私から連絡するから電話番号教えてもらえる？」

そう言う彼女はトートバックから手帳を取り出した。

僕は名前と携帯の番号を伝えた。そして

「失礼ですがお名前を伺っても良いでしょうか？」

と言った。

「綾女。吉村綾女」

良く見ると彼女はとても美しい女性だった。スラリとした手足。女性らしい体の線。

黒地にさりげないブランドネームの入ったTシャツ。

太腿にピッタリとして裾の少し広がったブルージーンズ。

素足にはミニールといった服装と、長い髪を後ろで束ねアップにした髪も良く似合っていた。

白いうなじが眩しい。

彼女の名前をそのまま体現したような、そんな女性だった。

「綾女さんですね。良い名前だ」

「ありがとう。そう言うべきよね。あなたの名前も良い名前よ」

少しの間だけ彼女が微笑むと、そこにはとても親密な空気が流れた。

「2、3日中に電話するからそれでいい？」

「ええ、有り難い」

「それじゃあ行くわね」

「突然引き止めて申し訳無かった。気をつけて」

そして僕は別れた。

すっかり初夏といった感じの風が彼女の後姿を追い越して、街路樹の葉を大きく揺らしながら吹いて行った。

彼女の部屋。返信。(前書き)

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

彼女の部屋。返信。

こざっぱりとした部屋。フローリングにアイボリーの壁紙。木目の扉のついたクローゼット。

奥行き40センチほどの折りたたみデスク。

その前の壁にはオードリー・ヘップバーンのセピア色のポストカードが数枚ランダムに貼りつけてある。

デスクにはノート型PCが一台。ポツンと言った感じで寂しそうに佇んでいる。

広さは6畳ほどだろうか。

ベッドでは寝息を立てている女性が一人。

傍には車椅子がある。

ベッドの脇には、何種類もの錠剤のシートとエビアンのPETボトル。

メンソールの煙草と灰皿。

そしてティッシュBOXとカッターナイフが無造作に置いてある。

ベッドの傍らにもう一人女性が立っている。

その視線は眠っている女性に注がれている。

奇妙なことに二人の顔は全く同じ。うりふたつだ。

やがて立っていた女性はドアの方へ歩き始め、部屋を出ていった。終始無言で。いやその部屋は無音に包まれていた。

静寂を超えた無音。

歩く足音も寝息も音の実態を失って居り、誰の耳にも響かない。

ドアがやはり無音で閉まった。

僕は目を覚ました。

「綾女？」

僕の声は狭いアパートの部屋のなかで響きもせず、隙間風が抜ける

ように消えて行つた。

また夢だ。

エリスの、恐らくは彼女の事故の夢を見て以来。2度目の夢だ。今夜、夢の中に吉村綾女が二人いた。

一人は寝息を立てて居り。一人はそれを無感動に見つめている。まるで何かの象徴みたいだった。

綾女が電話をすると言つた期日はもうとつくに過ぎていた。何日待っても音沙汰は無かつた。

僕はもしやと思い携帯電話をとる。着信は無かつた。が、メールが入っていた。エリスのマガジンだった。

今日、病院に薬だけ取りに行きました。眠剤が変わつた。けど眠れません。

暇な方。

返信下さい。

b y エリス

返信だつて？そんなこと出来るのか？

僕は今まで全くそのことに気づかなかつた。やれやれ。

もっと早く知っていれば、僕は彼女と接することが出来たのだ。もっとも通常のメールマガジン発行システムに返信機能は無い。このシステムの特徴らしい。

僕が気づかないのも当然と言えば当然なのだ。

時間は深夜2時を過ぎていたが、僕は試しに返信してみる事にした。

こんばんはダニエルといいます。

貴方のマガジンに触発されて、貴方の詩などを紹介するマガジンを発行してしまいました。

ご迷惑だったかもしれません。

ともかく貴方の言葉に何か魅かれてしまったのです。

一度お話してみたかったです。

まさか、メール返信できるなんて知らずにいました。

ずっと貴方と話をしたいと思っていました。

貴方の手首の傷をひとつでも減らせるのなと思っていました。
良かったら返信下さいね。待ってます。

byダニエル。

僕は送信ボタンを押すと煙草に火をつけた。

窓に目をやると曇っていて、今夜は月が見えなかった。

彼女の部屋。返信。（後書き）

http://plaza.rakuten.co.jp/
/24jihatu0jityaku/
24時着0時発：
：
管理人MISS・Mさんの協力により執筆しました。本章より企画協力していただきました。

杏（あん）（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

杏（あん）

僕はまたいつものようにロング・グッドバイのドアを押す。

「いらっしやいませー」

若い女の娘の声だ。

「杏か。久しぶりだな」

「お久しぶりー。元気でした？」

「ああ、君も元気だった？」

「ええ、もちろん。昼間の仕事が忙しくなってお休みしてただけです」

「もうあたしのことなんか忘れてたでしょう？」

「まさか」

「本当に？」

「もちろん」

「そう。なら良かった」

杏は相変わらず明るく爽やかな女の娘だった。

「あれ、一人なの？」

「一人じゃ何かいけない？」

杏はそう言っていたずらっ子のような笑みを見せた。

「そうじゃないよ。もう一人でまかされるようになったのかと思つてね」

「嘘。こいつの酒を飲まされるのかって顔してるくせに」

「おいおい、からかうなよ。前にも言つたろう。君の作ったサイドカーは美味かった」

「ふふ。で、あたし一人ならどうするつもり？口説くの？それとも襲う？」

「おいおい。何だって君を僕が襲うんだよ。それに口説くも何も、前にデートだつてしたじゃないか」

「たった一度ね」

「僕は君みたいに健全で綺麗な女の娘と居るのが得意じゃないんだ。もつともそんな機会もほとんど無いけど。君は大事な友達だ。あまりみつともないところを見せて嫌われたくない」

「どうかしらね。マスター」

キッチンからマスターが出てきた。

僕にちらりと目をやり

「今夜はどうする」

と言った。

「ラストイーネイルを」

「あたし一人でなくて残念でした」

杏がグラスに氷を落としながら言う。

やれやれ。この娘はどうしてこんなに僕をからかうのだろう。もちろん悪い気はしない。

とても良い娘だと思う。屈託無く、明るく無邪気だ。

きっと誰からも愛されて来たのだろう。見ていて微笑ましくなる。

こういう娘はめったに居ない。いつまでもこのままで居て欲しいものだ。

「まいった降参だ。君には勝てないよ、勘弁してくれ」

僕は両手を上げて細かく左右に振って見せた。

杏がグラスを僕の前に置く。

週末のせいか客の入りはまあまあだったが、常連客は誰もカウンタ―に居なかった。

窓際の席はいっぱいだったので、僕はそのままカウンターに腰を下ろした。

「最近良く来るんだって？ネコさんが言ってた。また眠れないんだよ」

「うん。まあそうなんだ」

「何か悩んでるの？」

「いや、そうじゃないよ」

僕が言う。

「さては女が出来たわね？白状しなさい」

杏は右手でピストルを形作って僕の胸に向けた。
そのとたん僕の携帯電話が音を立てた。

YOU GOT A MAIL.

「ほら見なさい。やっぱり女だ、白状しないと許さないから」
杏は微笑みながら言った。

この娘のこういったときの微笑が僕は好きだ。

「わかったよ。白状するからメール読んで良いかな？」

「よし。なら勘弁してあげましょう」

杏はピストルを引つ込めた。

エリスからの返信だった。

ダニエルさん。こんばんわ。

私アナタのメルマガ知ってます。

読みました。私のメルマガを紹介してくれてアリガトウ。

それと、「比処に居ないアナタへ」も読みました。

温かい詩をアリガトウ。

byエリス

僕はすぐさま返信した。

こんばんわエリスさん。

驚きました。

僕のマガジンを本人が読んでくれてるなんて、思いもしなかったです。

信じられないような偶然です。

全く驚いた。

こちらこそ読んでもらえて嬉しいです。

貴方の詩はとても心に突き刺さります。
痛みが伝わってきます。

僕なんかよりずっと文才が有りますね。
もったいないですよ。

詩人にだってそんなに居ないと思います。

あんな風に率直な、それでいて美しさの有る詩が書ける人。

もし貴方が、花について詩を書いたら　きっと素晴らしいものを書くでしょうね。

実は今BARにいます。夜中に目が覚めるといつもここへ来ます。
そしてアルバイトの女の娘にからかわれて困っているところです。
もうタジタジです。

女性と言うのは男より色んな面で優れているのですね。
もちろん貴方も。

byダニエル

「終わった?」

「うん、もう済んだよ」

「じゃ、白状しなさい」

「冗談じゃなかったの?」

「あたしはアナタに冗談なんて言ったことはありませんよーだ。全部
本気なんだから」

「じゃ、さっきの襲うとかそういうのも?」

「当然」

ふう。

彼女の言葉がどこまで本当なのやら僕には見当もつかない。

「で、彼女は何て言ってきたの?」

「本当に女だと思ってるの?」

杏は頷く。

「何で判るの?」

杏は、信じられないと言った顔つきで。

「そんなの、当てずっぽうに決まってるじゃない」
はあ。全くなわない。お手上げた。

僕は諦めて一番最初のエリスのマガジンを見せた。
しばらく読んでいた杏は。

「何これ、最近こういう女の子が趣味なの？」

「趣味…。趣味って何だよ。ただ胸を打たただけだ。綺麗だけど
痛みが伝わってくる。そうだろう？」

「それは判るよ。で最近はおっぱいこの人とメールしてるんだ、こ
んな夜更けに毎晩」

「ちよつと待つてくれ。メールするのは今夜初めてだ。それになん
だい。どうして僕が浮気を責められた夫みたいなこと、君に言われ
なきゃならないんだ？」

「ウ・ワ・キ・モ・ノ」

杏は僕の肩を人差し指で突つく。

「あたしには会いにも来ないくせにー」

「ここは一体なんなんだ？安スナックか？君はホステスで僕はくた
びれたサラリーマンか？」

「電話もくれない」

僕は深呼吸をし。

「ねえ杏。君と話すのは楽しいよ。僕はそれが好きだ。
でもこういうのって、ふざけるにしても疲れるよ。

もつと普通に話しようよ。頼むから僕を混乱させないでくれ。

僕は君が何を考えてるかさっぱり判らないよ」

僕はガツクリと肩を落とした。

「ハッハッハ」

突然マスターが笑い出した。

僕は驚いてしまった。

もう一年近くこの店に来ているが、マスターが声を立てて笑うのを
はじめて聞いた。

いつも無口というより、無愛想で いらしゃい とも言わないのだ。

「アンタ修行が足りないよ。マダマダだな」

そう言つて僕の肩をポンポンと叩く。

「修行が足りないぞ」

杏が可笑しそうに頬を膨らませ言つと、何とか一件落着した。

杏が僕に好意らしきものを抱いているのは、僕も気づいている。

だからこそ僕は細心の注意を払わなくてはいけない。

彼女のような天真爛漫な女の娘は、そうそう居ない。

僕なんかと深く関わつて傷ついてはいけないのだ。

僕は今の彼女との友人関係を失いたくなかった。

年だつて20も離れている。僕の娘だとしてもおかしくない年頃だ。

そんな娘と友達で居られると言つのは、とても貴重な関係なのだ。

いつか僕の傍に居なくなるのは解かりきつている。

だからこそ僕の方からそれを壊したくない。

いずれ彼女も僕なんかには興味を持たなくなる。

それまでは友人で居たいのだ。

「杏。君はいつたい僕に何を望んでいるんだい？」

「甘く危険な関係」

こともなげに言つて見せた。これだ。全くこの娘は。

「あのね杏。そう言つのはもつと将来有望で、君を守るだけの力の有る、もつと若い人と探しなさい。僕は君のパパと大して年も違わないだろう？」

「それにもう一つ。

出来ればあまり性的なことにはばかり意識を働かさない人のほうが望ましい。

僕みたいな男はもつとも君を傷つけやすいし。

その傷が君にとってプラスになることは無いんだ。

君みたいな可愛いお姫様は、従順な騎士を探すのが一番なんだよ」

「そして幸せになったら、僕みたいな人間のことは素直に忘れるんだ。

心の命じるままにね」

少々説教臭くなったがこれは本心だった。

杏はしばらく僕を見つめていたが、マスターのほうを向いて囁くように一言。

「ですって。お父さん」

「!!!!」

僕は噴出しそうになって慌てて酒を飲みこみ、返って咳き込んでしまった。

「お　お父さん？」

杏はスツールから半分ずり落ちた僕を見ながら、僕にしか見えないようにカウンターの下で左手の指をそろえ掌を上に向け、脇を絞め肘を内側にしてマスターを指した。

そして僕の耳元で。

「あたしの父です」

と言った。

僕は言葉を失って二人を交互に見比べた。

マスターには悪いが、美女と野獣だ。

もっとも僕の娘だったとしても、皇女と乞食といったところだが。

全く今日はここ数年で一番驚いた記念日になりそうだ。

杏（あん）（後書き）

http://plaza.rakuten.co.jp/24j
ihat0jityaku/
24時着0時発……
>管理人MISS・Mさんの企画協力。作詩提供により執筆しました。

23歳（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

23歳

「徹、（とおる）アイスクリーム食べたい」

湖を後にした二人は一路清里へ。

しょうがねえなあと思いつつ徹は車を止める。

清里名物の大学寮のアイスクリームショップの前で。

「アイスなんて何処もそんなに違わないだろう？第一寒いじゃねーか」

「そんなこと無いよ。ここのは美味しいんだから。ガイドブックにも載ってるし評判良いよ。寒くっても車の中で食べればいいでしょ。」

「そうかあ？まあ綾女が言うならそうなんだろっな？」

そう言つて徹はしぶしぶソフトクリームを買つて来た。

徹は一口舐めて。

「ああ、美味いわこれ」

「でしょ。でしょ。」

綾女は無邪気に笑う。

「ああ、さてお次は何処へ参りますか？姫様」

「中心街に戻つて写真撮ろっよ。ウエディングドレスとタキシードで」

「お前さあそんなので嬉しいのか？偽物だぜ」

「いいのお。徹はさ、あたし達の夢を疑似体験するの嫌なの」

「照れくせーよ」

「予行演習よ」

相変わらず、徹はしょうがねーなーと言う顔をしている。

「まいいか」

「行こうよ早く」

「OKお姫様。なんなりと」

徹と綾女は一泊で清里めぐりの最中。徹はほとんど綾女に引きずら

れていた。

だがまんざらでもない様子だ。

「しかし混んでるな。」

「しょうがないよ週末だもん。それとも海のほうが良かった？」

「いや、そっちも同じだろ。混んでるのは」

「大体俺は江ノ島界隈の茶色い海は嫌いだ」

「じゃあさ漬物や寄つてよ」

「はあ？漬物？勘弁してよ。まじで」

「お父さんの、お土産にするの」

「家族思いだな。はいはい行きましよう何処でも」

徹と綾女は今年で交際3年。徹26歳。綾女23歳。青春真っ只中。

「徹さ。聞きにくいんだけどあたしのことまだ好き？」

「はあ？じゃ何か？俺は好きでもない女と、バイト代叩いてこんな人ごみの中 3時間も車飛ばして こんな山奥へ来るような寛大な男なわけ？」

「なんかさ、最近さ、突慥貪だし。もしかして飽きてないかなって

…」

「何鬱になつてんだよ。あゝ混んでる。写真撮つたらホテル行こう」

「お土産はホテルで買おうぜ。もう我慢出来ねえ」

「うんいいよ。そうしよう」

二人は写真館によつてぎこちなく結婚式風の写真を撮る。徹の姿が可愛い。

「やつぱ俺カッコ悪い」

「だいじょうぶよ。あたし気に入った。幸せ」

「まあ綾女がいいならかまわないけどよ」

そしてホテルに戻る。

「ふう。一日200キロラリーは疲れるな」

「ごめんね徹」

徹は濃いサングラスを掛け直し、綾女の肩に手を回す。

「綾女は俺と一緒に湖が見たかった」

「それでいい」

「それだけで十分だ」

山の夕暮れは早い。未だ6時だと言つのに当たりはネオンで、どちらかと言えば毒々しい雰囲気をかもし出していた。しかしそんなことは二人には関係の無いことだった。

二人は二人だけの愛を確かめられればそれで良かった。

それから3ヶ月後のゴールデン・ウィーク。

二人は筑波の犬の動物園にやって来た。

数々の種類の犬が居る犬専門の動物園だ。

ダルメシアン

キャバリアキングチャールズスパニエル

トイプードル

ビアデットコリー

ビーグル ラブラドルレトリバー

ローシェン

ロットワイラー

ワイマラナー

ワイヤーフォックステリア

そんな犬たちがたくさんいて。中にはショーをやっている犬たちもいた。

綾女はもう、すっかりご機嫌だった。

徹はと言えば犬に近寄るたびに逃げられてふて腐れている。

「犬にモテないね」

綾女が言つと。

「俺はホモ・サピエンスの雌にモテればそれで良い。犬ツコロの雌に興味はねーよ」
と悪びれる。

綾女は一日中犬たちと遊んで、すっかりご満悦だ。

閉館時間の17:00まで犬たちとじゃれ合っていた。

「おい犬のお姫様。そろそろ行かねーか？泊まる場所探さねーと」
「そうね」

そして綾女は。

「帰りはあたしが運転するよ」

「そうか？それは助かる」

走り出して2時間どこも満室だ。

「ないね、泊まるどころ」

「しかたねえな。どっか山のほうのモーターでも探せば有るんじゃないか？」

そして見知らぬ山道を走るが、なかなかそれらしき建物も無い。

時刻は21:00を回っている。なおも山道は登って行く。

幾つものカーブを抜け少しきつい左カーブに差し掛かる。

対向車のヘッドライトが正面に飛び出す。

綾女が気がついたのは病院のベッドの上だった。

いつのまにか父親が来ていた。

「徹は？」

綾女はそう言ったが声になったのは「あーあー」と言う音だけだった。

父が近づいて何か言っている。

綾女には聞こえない。

そう言えば静か過ぎる。医療機械の音も看護師や家族の声も何も聞こえない。

すべては静寂の中だった。

数週間の入院中。レスキュー隊の隊員が見舞いに来た。そして徹の

最期を伝えた。

事故は大型トラックとの正面衝突。

軽自動車の徹の車は、メチャメチャ潰されていたと言う。

助手席に居た彼は咄嗟に綾女をかばったのだろう。

救助活動の時、彼はハンドルと運転席の綾女の膝に挟まる格好でしばらくは息が有ったと言う。

かすかな声で何かを呟いていたそうだ。

その隊員が救急車で搬送するときにはつきり聞いた言葉は

「ありがとう。あや」

という言葉だった。

それを伝えに来たのだった。

隊員の胸には藤本亮というネームプレートが読めた。

「だからアナタはしっかり生きてください」

そう言つて彼は病室を後にした。

これらは全て筆談で行われた。

綾女は既に聴覚を失っていたのだった。

半年後退院した綾女の姿は車椅子に乗っていた。

更に悪いことに左腕の麻痺。そして言語障害だった。

綾女の半年間は過酷だった。怪我の治療もそうだったが。

精神的にも恋人の前途を失ったことに苛まれ、おもい通りに動かぬ

手足でいながら。

時々大いに暴れた。綾女は自分を責めていた。これ以上ないくらいに。

事故自体は大型トラックの飲酒運転が原因と言うことで綾女の過失は無かった。

だからと言つて徹が帰って来るわけでは無い。

道端に手向けられた花束がそれを痛いくらいに物語っていた。

そこには深い秋の気配が重く垂れ込めていたのだった。

23歳（後書き）

http://plaza.rakuten.co.jp/24j
ihatuojit-yaku/
24時着0時発……
>管理人MISS・Mさんの企画協力。作詩提供により執筆しまし
た

double (前書き)

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

double

僕が2度目に綾女に逢ったのは5月の連休に入ってからだ。

この前と同じ交差点で信号待ちをしていると、僕の車の前に手を振りながら身を乗り出して走ってきた。

「この間はごめんなさいね、電話出来なくて」

窓越しに彼女の声が聞こえた。

僕は驚いて左側のウィンドウを開けた。

「ねえ、乗ってもいい？」

「どうぞ」

僕はロックを上げた。

「ありがとう」

そういうとスルリと言う表現がピッタリ当てはまる仕草で、彼女は車に乗り込んだ。

「あたしあれから毎週土曜の朝ここで待ってたのよ。アナタが通るのを」

白いワンピース姿の彼女は言った。

「こつちが電話するって言ったでしょう？」

でも携帯は壊れるし、手帳は失くすしで連絡できなかったの」

「だから待ってたの。逢えて良かった」

「わざわざそんなこと。良かったのに」

僕は言った。

「でも、エリスには伝えておいたわ。

アナタが探しているって。これこれこう言う訳でって」

「ありがとう。」

でも、あれから直ぐに連絡が取れたんだ」

「ええそれ知ってるわ。アナタがダニエルでしょう？」

「何で知ってるの」

彼女の親密な話し方につられて、僕もかしこまった話し方をしてい

なかった。いつのまにか。

「メールの返信が来たっていつてたわ。多分アナタだろうって」

「何でそこまで判るんだろう？」

「女の勘は鋭いのよ」

「ところで僕達は何処に向かっているんだろう？」

「何処だって良いわ。話の出来るところなら」

「了解」

僕は一番近いドライブイン・レストランに入り車を止めた。

店に入りコーヒを二つ頼むと僕は向き合った。

「色々気を使わせて悪かったね。礼を言うよ。ありがとう」

「アナタって礼儀正しいのねえ」

「そうでもないさ」

「ところでこれは僕の憶測なんだけど君はエリスさんの姉妹じゃないのかな？」

もしかしたら双子の」

「この間は友達と言ってたわね。確か。随分飛躍したみたいだけど？」

「実はまた夢を見たんだ。君がベッドで眠っているのをもう一人君にそっくりな娘が見つめている。そう言う夢」

「アナタいつもそうやって夢で物事を判断するの？」

「いや違う。ただこの間も夢の直後に君に出遭った。

それにここ何年も夢なんか見たことが無かったんだ。不眠症で薬を飲むからね。

ところがまた君の夢を見た。それも今度は二人も出て来た。

だから、もしかやと思ってね」

「ふうん」

面白くもなさそうに彼女は言った。

「で、私がエリスと双子だと何か問題でもあるの？」

「もちろんないよ」

「ならどうだって良いじゃない」

「そう言われればそうなんだけどね、どうも気になって…」

「ねえ、アナタ今日このあと2〜3時間暇は無い？」

彼女は僕の言葉を遮って唐突に訊いて来た。

「時間なら丸一日あるけど」

「ちょうど良かった。じゃ映画見に行かない？」

「君と僕が？」

「そう、もし今日もアナタに逢えなかったら一人で行くつもりだったのよ。」

付き合いなさいよ」

「いいけど何で僕と？」

「映画なんて誰と行こうが、さして理由が必要なことでもないでしょう？」

「それはそうだけど」

「いいじゃない行こうよ」

あっけらかんとしたオープンな娘だ。

断る理由も見つからないので僕は誘いに乗ることにした。

「OK。行こう」

「あたし前から見たかったんだ。ドッペルゲンガー」

「ドッペルゲンガー？あの自分が二人居るっていう？」

「そう」

「そんな映画やってるの？」

「そうよ」

僕らは新宿まで車を置いて、電車に乗ることにした。

電車の中で綾女は言った。

「あの人、エリスは多分後一年しか生きられないの」

「え、どうして？」

僕は驚いた。

「何か重病なの？」

「理由は言えないけどそうなの。だから今日の映画を良く覚えておいて」

綾女は真剣に言った。

「良く分らないいな。映画と彼女の余命一年て言うのが何か関係有るの？」

「ええ、有るのよ。だからしっかり覚えておいて。それがエリスを救う道なの」

「今一つ理解できないけど、分かったよ良く覚えておくよ」

「必ずそうしてね。あたしはあの人を死なせるつもりはないの」
「うん」

僕は映画館に着いてチケットを二枚買った。上映まで後十分だった。

指定席に座るとすぐに予告編が始まった。

その間に僕は買っておいたパンフレットに目を通す。

ドッペルゲンガーを見たものは一年以内に死ぬ。

大きなキャッチコピーが目を引く。

そして役者の紹介と大まかなあらすじ。

主人公のライリーはある日もう一人の自分を見てしまう。

そして伝承に拠れば、自分の分身を見たものは一年以内に死ぬ。

ライリーは自分を救うべく、占い師、悪魔払い師、教会とあらゆる手を尽くして助かる道を探すが、一向に効果的な手が発見できずに時間が過ぎて行く。

そこに或る女が現れ。

彼を救う道を教える代わりに100万ドルを要求するそして…
と言う話らしい。

場内が暗くなり本編が始まる。

パンフレットの解説通り物語が進んで行く。

そして最初は相手にしていなかった女性の申し出しか、すぎるものが無くなり、家族の幸せと自分を守るために、ライリーは借金をして彼女に100万ドルの小切手を渡し自分を助けて欲しいと懇願するようになる。

果たして彼を救う方法とは。

ドッペルゲンガーと自分自身の全身を鏡に同時に映し聖水を浴びることだと言う。

期限まで後一日と迫るその日。

彼はドッペルゲンガーを自分自身の前に立たせることに成功する。

いよいよラストシーン。

女は大きな鏡を彼らの前に向けるライリーは聖水を浴び、鏡が目映く発光しドッペルゲンガーは彼の体に吸い込まれて行く。

見事合体を果たした彼は、呪いから開放され死の呪縛を逃れる。

そして家族と平穏な暮らしに戻って行く。

ハッピーエンド。

それほど難しい映画ではない、が役者達の演技も冴えそこそこ楽しめるスリラーだった。

場内が明るくなり人々が立ちあがり始める。

僕は綾女を促し立ちあがろうとすると、綾女の姿は忽然と消えていた。

ずっと隣で座っていたはずだ。

立ちあがる気配も無かった。

しかし、彼女は消えてしまった。

「だから今日の映画を良く覚えておいて」

その台詞だけが僕の胸にこだましていた。

double(後書き)

http://plaza.rakuten.co.jp/24j
ihat0jityaku/
24時着0時発...
管理人MISS.Mさんの企画協力。作詩提供により執筆しまし
た。

M a i l (前書き)

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

M a i l

アナタはどうて。あたしに優しい言葉をくれるのですか？
あたしには何も出来ないのに。

あたしはただ、夜を見上げて手首を切るだけ。
自分を恨みながら。

アナタはどうしてやさしいのですか。

今夜は月が紅い。

あたし。

紫色の夜の空が好きです。b y アリス

ダニエルです。

どうして貴方に言葉を贈るのか。

理由はわかりません。

ただ、貴方が助けを必要としているように感じるのです。

僕は優しい人間ではありません。

でも、貴方が必要としているのはモノではなくて。

誰かの愛だと感じるのです

誰かが貴方を包んであげなくてはいけない。

そう感じるのです。

貴方の言葉は、僕の胸に刺さります。

そして、それは引き抜くことが出来ないのです。

だから僕は貴方に返事を送るしかないのです。

b y ダニエル

あたしは

淋しい。刹那い。

この世にあたしが必要な理由なんて無いと思って。

とても苦しい。

あの人死んでも、あたしは のほほんと生きてる。
それでいいわけない。

あたしが死ねば良かったんだ。
なのにあの方は死んじゃった。
死にたい。

死んであの方の元へ行きたい。
なのに幾ら切っても死ねない。
あたしはどうすればいいの？
どうすれば。

by エリス

僕にはその答えは言えません。

辛いでしょう。

苦しいでしょう。

淋しいでしょう。

でも、でも。

たぶん貴方は、その人に命をもらったんです。
だから生きているんだと思います。

「死なないで」とは僕には言えません。

でも貴方に死んで欲しくない。

誰も貴方に死んで欲しくないんだと思います。

そして、貴方の大事なその人も。

by ダニエル

僕らはこんな風に何度も、何度もメールで話をした。

ほとんど毎日。

天気のことや、買い物のこと、病院のことや、お酒のこと、食事の
ことや、自傷のことや。

とにかく考えられる限りの話をした。

僕らの間には親密でやわらかな感情が芽生えていた。

そしてそれは、友情とは少し違った感情だった。

僕らは少なくともNETの上では、お互いを必要な人間だと思い始めていた。

僕にできることは、何も無いのだろうか。

彼女のために僕ができることは…

空しかった。

刹那かった。

できることなら彼女のところへ行って抱きしめてやりたかった。

けれど、けれどそれは出来ない。

彼女は広大なNETの何処からか助けを求めている、僕にはそこが何処なのかわからないのだ。

僕はまるで難破した船の生存者のように、どこにも陸の見えない海の真中で漂っているのだ。

そして彼女も同じように、とてつもなく広い宇宙の中へ一人放り出されて孤独をかみ締めているのだった。

僕のメールBOXが彼女のメールで一杯になった頃、季節は梅雨を過ぎ もう初夏だった。

M a i l (後書き)

http://plaza.rakuten.co.jp/24j
ihatujit yaku/
24時着0時発...
管理人MISS・Mさんの企画協力。作詩提供により執筆しまし
た。

出逢い（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

出違い

いつものようにロング・グッドバイで飲んでいた時のことだ。

「ねえヨージさん。デイズニールランド行かない？」

杏が言った。

僕はマリブビーチを飲みながら。

「いいよ。いつ？」

「今度の日曜日」

「多分OK。何も無いはずだ」

「良かった。ちょうど友達に社員用割引券もらたんだけど、日曜で期限切れなの」

「僕のほかに相手居なかったの？」

「またそういうこと言うのね。アナタと行きたいのお！」

「ごめんごめん。つい口が滑ってね。済まなかった」

「デートなんだからちゃんとして来てよ？ 髪も切って髭もそって

……」

「OK。ちゃんとした格好で行くよ。前のときみたいでいいかな？」

「そうね。そうして」

空になったグラスをカウンターの奥へ押しやる。

「モテモテッすね」

ネコがからかう。

「ああ。杏は俺に気が有るからな」

僕も乗って答える。

「杏ちゃんが悪趣味だからね」

ネコが続ける。

「その通りだ」

僕が言う。

「いい加減にしなさいよ。あたしの人を見る目は確かなんだからね」
杏がむくれる。

僕とネコは二人で両手を上に上げ、降参の格好をした。

そんなわけで僕は土曜日に床屋へ行き、髪を短く切りひげを剃り落とした。

それから靴屋へ行き新しいナイキのランニング・シューズを買った。これだけ準備しておけば良いだろう。

その日は酒を抜いて早く眠った。いつもより多目の睡眠導入剤を飲んで。

次の日の朝7:00。杏からのモーニングコールが入った。眠い目をこすって僕は携帯電話を取る。

「おはよう」

生あくびをしながら答える。

「ちゃんと起きてる？」

「大丈夫だよ。起きてる歯も磨いたし髭も剃った」

僕は嘘をつく。

「遅れないで来てね」

「ああ。ちゃんと行くさ」

「じゃあ後でね」

「うん」

僕は急いで身支度をし、なんとか待ち合わせに間に合った。

電車で揺られ到着するなり、杏はスプラッシュ・マウンテンに走る。

「他は良いけど、これだけは、最初に乗らないと後で乗れないからね」

「なるほど」

どんなことにもノウハウはあるのだ。

僕らが早めの昼食のためレストランに並ぶと、隣に車椅子の女の娘と父親らしい姿の二人が並んだ。なんととはなしに彼女を見ていた僕は愕然とした。

「あ、綾女！」

その声に振りかえったのは父親らしい男性だった。

彼の表情には驚愕の色が浮かんでいた。

そして綾女の顔にも同じ表情があった。

「徹君!？」

彼は言った。

僕はその意味の飲み込みないまま挨拶をした。

「あの、失礼ですが綾女さんですよね？」

「君は？」

僕は名を告げ彼女とは2回ほど会っていることを話した。

「綾女さん。どうしたんですか？事故に遭われたんですか？」

「もう3年になる。ずっとこの姿だ」

僕は困惑した。綾女は元気に僕の前に2度も姿を現した。

それもこの春のことだ。

彼女は車椅子の後ろに下げたバッグから新書版より一回り大きいポ

ケットPCを取りだし。

「徹なの？ちがうよね」

と打ち込んだ。あーうーとうなるような声を発しながら。

彼女は口がきけないのだろうか。僕は本名とHNのダニエルとをP

Cに打ち込んだ。

彼女は合点が言ったようだ。

「アナタがダニエルね」

「あたしはエリス。あたしは綾女」

じゃああの元気な綾女は誰なんだろう。

不意に彼女と見た映画を思い出す。そして彼女の言葉。

「だから今日の映画を良く覚えておいて」

まさか彼女は綾女のドッペルゲンガー!？

だから彼女は、つまり車椅子の綾女は1年しか生きられないというのか？

残酷だ。残酷過ぎる話だ。

僕はPCに打ち込んだ

「君は綾女を見たの？」

「彼女はあたしの分身。あたしの若い頃の分身」

「つまり、君のダブルなんだね」

「僕は彼女と2度会ってる。映画も一緒に見た。そのことは知ってる？」

「知らないわ」

「彼女は君があと一年生きられるかどうかだと、僕に言ったそのことは知ってる？」

「知らない。あたしは後一年の命なの？」

「彼女がそう言った。僕に君を救えとも言った」

杏は僕らの会話を覗きこむように見ていた。

杏の表情にも困惑の色が濃く出ていた。

僕と綾女はNET上では幾度と無く話をしている。

初対面のよそよしさは無かった。

「徹君て君の前の彼氏？」

その問いには父親が答えた

「フィアンセだった。事故で亡くなったが」

「君は彼に良く似ている。それで私も驚いてしまった」

僕は納得した。

綾女は。

「ダニエル。あなたに会えて良かった」

「僕もだ。僕はずっと君に会いたかった。初めて君のマガジンを見たときからね」

そして僕らは4人で食事をした。彼女は手が不自由なのか、父親が食事を口元へ運んでやっていた。

杏は一言も口をきかなかった。

綾女の父が言った。

「彼女は君のステディかい？」

「いいえ、純粋な意味でのガールフレンドです」

「よさそうな娘じゃないか」

「ええ、稀に見るいい娘です」

「貴方のお嬢さんもとて良い人だ」

「私にも自慢の娘だよ。こんな風になってしまったがやはり自分の子は可愛いものだ」

「彼女はとてもピュアな人です。僕達はもう何ヶ月もメールのやり取りをしています。だからとても良く分かります。彼女は純粋だと」時折彼は自分の娘に大きゆっくりく口を動かし、僕達の会話を伝えていた。

彼女は耳も聞こえないのか。

僕は彼女の境遇に同情的になっている自分を発見し、少し嫌気が差した。

彼女はそんなことは望んでいないだろう。

僕はとても恥ずかしい気持ちになった。

食事を終え僕達は儀礼的な挨拶をし別れた。

いつまでも杏をほっておくことも出来ないし、綾女達にも予定があったからだ。

杏はやっと口を開いた。

「彼女がエリス？」

「そうだ」

「かわいそう」

「そうかもしれない。でもいらぬ同情は失礼だよ」

杏はもう何も言わなかった。

僕らはいくつかのアトラクションにのり。夕方のパレードを見た。相変わらず幻想的なパレードだった。ここはやはり夢と魔法の国なのだ。

シンデレラ城の向こうに花火が上がり閉園時刻の近いことを知らせていたが、僕は土産も買わずに最後まで花火を見ていた。帰り際僕は杏に尋ねた。

「楽しかった？」

「うん、とっても」

そう言っただけは僕の肩に頭を持たせかけた。

こうして幸せな日曜日は幕を閉じた。

出逢い（後書き）

http://plaza.rakuten.co.jp/24j
ihatuojit-yaku/
24時着0時発……
>管理人MISS・Mさんの企画協力。作詩提供により執筆しました。

僕と彼女の途惑い（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

僕と彼女の途惑い

杏と別れて部屋に帰りついた僕はしばらく呆然としていた。魔法が解けたみたいに心が疲れていた。

そしてシヨックだった。

まさかエリスが綾女だなんて。しかもあんな身体で。

彼女の苦しみは僕に計り知ることの出来るような、そんなものではなかったのだ。

僕はとてもやるせない気持ちになった。

それと同時に僕の胸をざわめかせていたものが、ハッキリと形を現し始めていた。

それは霧のような、雲のような曖昧な存在から 今は鉄の塊のように重く僕の胸に沈み込んでいた。

あたしの心は風に吹かれたブランコのように、時に大きく時に小刻みに 前後にそして左右に揺れ動いていた。

あたしはエリスとして彼に友愛以上の想いを抱いていた。

でもあたしの心の中には徹がいる。今でも三年前のままの徹が。

あたしは音を失い言葉を失い、身体 of 自由を失った。

でもそんなことはどうでも良かった。

徹さえ生きていたなら、あたしの心は悲しみとも苦しみとも無縁だったに違い無い。

けれど徹を失って、あたしの心は壊れてしまった。

この腕の傷はあたしの徹への想い。

消すことの出来ない徹への想い。

そして後悔。

でもあたしの心は揺れている。出遭ってしまった彼の所為で。

彼は三年前にあたしを引き戻してしまった。

徹と全く同じ姿で。

徹以上の優しさで。

出遭うはずのない人だったのに。

在っては行けない偶然だったのに。

神様は意地悪だ。

なぜあの人と出遭わせたの？

あたしの心はもう過去へは戻れなくなってしまった。

神様あなたは、またあたしを苦しめようと言うの？

あたしは今、嵐の海に吞まれた小舟のように。

大きく、そして激しく揺り動かされている。

僕は冷凍庫に三分の一ほど残っていたウオッカのボトルを一気に飲み下し、そのままキッチンの椅子に座り宙を見つめつづけていたが、衝動を抑えきれなくなってエリスに、つまり綾女にメールを送った。

今日、貴方に出遭わなければ 僕の人生は違ったものになるはずでした。

今までずっと隠してきたことがあります。

貴方に出遭わなければ、一生言うことの無い言葉だったはずですよ。

でも、もう戻れないことを僕は知ってしまった。

だから貴方に伝えたいと思います。

僕は貴方と言葉を交わすたび、今まで抱いたことの無い 胸のざわめきを感じ続けてきました。

そして今日貴方の姿を見て、そのざわめきは硬い石の彫刻のように

ハッキリ僕の中に姿を現しました。

こんなことが言えるようなものは、何も無い男だと言うことは十分に自覚しています。

でも今夜言わなければ、僕はきっと後悔の深い淵から這い上がる事が出来ないでしょう。

だから貴方の迷惑を承知で言うことにします。

もう一度貴方に会いたい。

会って生身の貴方を感じたい。

どうか僕の願いを聞き届けてください。

いつまで経っても返信は無かった。

僕はその夜眠ることができなかった。

僕は一日待ち。二日待ち、三日待った。

そして四日目の明け方彼女のメールは来た。

アナタに出遭しまったあたしはどうすればいいの？

ずっと思っていました。

何処か知らないところであたしを支えてくれる人だって。

なのに突然、アナタはあたしの前に現れた。

あの人と同じ笑顔で。

お願いだからあたしを惑わせないで下さい。

アナタはあの人じゃない。

なのにあの人と同じ姿であたしの前に現れて。
あの日は隠していたけれど、正直途惑いました。

アナタの優しさは身に沁みるほど分かっていました。
でも遠く何処かに居る人だから。
何処に居るのか分からない人だったから。
だから安心して頼れたのに。

あたしはアナタと出遭ってしまった。
もういままでのようには話せない。
戻れないのです。

お願い。

あたしの心を連れて行かないで下さい。
ごめんなさい。
アナタに会うことは出来ません。

そのメールを最後に、彼女からのメールも彼女のマガジンも、僕の
ところへ届くことはなくなつた。

急逝（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

急逝

話すべき相手がもうアナタしかいません。だから私のわがママを許して下さい。

自分から連絡を絶っておきながら突然にメールをしてごめんなさい。あたしの父が急逝しました。くも膜下出血でした。会社の帰りに、駅の洗面所で倒れたのです。

発見されたのは翌日になってからでした。49歳でした。

あたしは母とも幼いとき死別しています。兄弟もいません。

だからもうあたしには自分を語るべき相手がアナタしか居ないのです。

あたしはこんな身体なので唯一の縁者の、父の母の妹の娘夫婦の所へ行くことになりました。場所は鹿児島です。温暖で養生するには良いところです。

ただもう本当にあたしは一人になってしまいました。

アナタを忘れたことはありませんでした。

父の居る時は忘れようとしていたけれど、忘れられませんでした。

あたしにはアナタの優しい言葉が必要なのだと、今更気づきました。又以前のように話し相手になってくれませんか？

とてもわがままなお願いだとは承知しています。

あたしは嫌な女です。

でももうアナタしか居ないのです。

アナタしか。

返事を待っています。

そして、ごめんなさい。

綾女

このメールが来たのはまだ夏の名残が激しい9月の半ばだった。

僕はそれまでの3月余り、毎夜酒を飲んで過ごした。

一晩で7、8杯のロックグラスを空にしているつも泥酔状態だった。

綾女との連絡をが途絶えた悲しみを紛らせたかったからだ。

おかげで胃をやられてしまい、吐血することもあった。

仕事も休みがちになり、鬱のすることも多くなっていた。

そんな時は3日3晩ベッドで、ろくに食事を取らず横になっていた。

何もかもが億劫になっていた。生きることさえもだ。

抗鬱剤や精神安定剤の量も3倍近くになっていた。

体重が8キロも落ちゲツソリとしていた。

しかしそれでも、僕はまだ生きていた。

救いだっただのは杏の存在だった。

彼女は時々僕のアパートへ足を運び食事の世話をしてくれた。

おかげでなんとか生きていられたのだ。

僕は綾女のメールを読み終えると。

自分の住所と本名を記し、何か有ったら直ぐにここへ連絡するよう

彼女の保護者に伝えておくように書いた。

そしてそちらの住所を知らせてくれるよう頼んだ。

僕に出来ることなら何でもするから、以前のように連絡を待ってい

ると書き添え返信ボタンを押した。

8月の頃(1)(前書き)

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

8月の頃（1）

僕が綾女にほとんど事務的とも言えるメールを返信したのには、少しばかり訳がある。

杏のことが幾ばかりか気になったからだ。

季節は夏の盛り。8月の始めに遡る。

バーテンのネコを相手に酒の好みについて、常連連中と議論していた時のこと。

ちようど5杯目のラストイーネイルを飲み干した。

途端に強い吐き気をもよおした。

洗面所に駆け込む間も無くカウンターで嘔吐した。

しかし吐いたのは胃の内容物では無かった。

そもそも、その頃の僕は夕食も取らずに酒を飲むのが習慣になっていた。

酒で薬を飲み下したりもしていた。

口に当てたお絞りが見る見る赤黒く染まって行くのを見て、杏は短い悲鳴を上げた。

マスターが僕を見て言った。

「胃をやったな」

僕は3枚のお絞りを赤く染めようやく人心地ついた。

「あんたもう帰んな。しばらく来ん方がいい。家でも飲んじゃいかんよ」

マスターが言う。

「大丈夫？一人でちゃんと帰れます？」

とネコ。

「あたしが送って行く。それほど近くないんでしょ？」
「いいって」

僕は言ったが杏は引き下がらなかった。

「ネコさん。車貸して」

そう言うのとネコからキーホルダーを受け取りカウンターから出てきた。

「大丈夫？歩ける？」

「そこまで酔っちゃいない。大丈夫だ一人で帰るよ」

「ダメよ」

そう言うて僕の右手を自分の首に回し肩で僕を持ち上げ立たせた。いつもの常連客の数人は、心配して声を掛けてくれた。

それらの声に、僕はまとめて。

「心配無い。悪くても潰瘍さ死にはしないよ」

と答えた。

杏の運転で僕はアパートへ着くと、すぐさまキッチンの流しへ行き再度吐き下した。

まだ口から出る液体は赤い色をしていた。

僕は杏に見られないよう慌てて蛇口をひねり水を流した。

これ以上心配させたくなかった。

振り向いて僕は

「ありがとう。もう大丈夫だ。最近少し無茶し過ぎたようだ。

しばらくは酒はおあずけにするよ」

そういつて服のままベッドへ横になった。

「男の人の部屋にしては散らかってないね」

「散らかすものが無いだけだ。ありがとう。もう戻っていいよ。

僕と二人でこんな夜更けに長時間居たら、マスターや君に気のある連中がやきもきする」

「マスターは平気よ。アナタを信頼してるもの」

「信頼？」

「僕はマスターに信頼されるような事をした憶えはないよ」

「長年酔っ払いの相手をしてるのよ。人を見る目くらいあるわ」

「ならなおのこと急いで戻りなよ。僕の評価は高くないはずだから

ね。さあ、行くんだ。

でないと僕のほうが、自分に対する信頼を失いそうだ。僕だってオスなんだからね」

それについては、杏はいつものようには茶化さなかった。

「明日ちゃんと病院行くのよ？分かった？」

「OK。ちゃんと行く」

「じゃ、おやすみなさい。また来るね」

「そんなに心配要らない。じき治る。また店に行くよ」

「しばらく来ん方がいい。家でも飲んじゃいかんよ」

マスターの口真似をして、少しだけ微笑んで 最後は心配そうな顔に戻った。

「じゃあね」

カチリとドアの閉まる音がした。

そんなわけで僕は鬱と胃潰瘍とを抱える身になってしまった。まったく大した財産だ。

杏が行ってしまうと、部屋は煙草のヤニでくすんだ 茶色い壁と天井のいつも通りの僕の部屋に戻った。

杏が居るだけでこんな部屋でも華やいで見えるのだなと僕は感嘆した。

8月の頃(2)(前書き)

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

8月の頃(2)

それからと言うもの。杏は2日置きに僕の部屋へ来るようになっていた。

いつも食材を抱えて。夕方6時になるとやって来た。

僕の胃を思い図って。中華粥。白粥。たまご粥。などが食卓に並んだそして決まって野菜スープ。

杏の料理の腕はなかなかのもので、外食慣れした僕をうならせた。食欲などほとんど無いのに、杏の料理はすると僕の身体に入っていた。

「実に美味しい」

僕はそう言わざるを得なかった。

それにしても、こつも甲斐甲斐しい女の娘の世話になるのは嬉しくも有り。

そして途惑うものだ。

僕は杏を大切に思っている。死んでしまった恋人の同級であり一度は終わりがけた僕らを最後まで導いてくれた。結果は彼女の死という悲しい結末であつたけれど。

それは杏に責任のないことだった。

前にも言ったが僕達は大切な友人だ。

しかしこの所。杏に対する僕の気持ち揺れているのはとても問題だ。

僕は彼女に恋をしないと決めていた。けれども彼女の僕に対する好意は抗うには些か難しいモノがあつて僕は困惑していた。

杏は僕が食事を済ますと。洗い物を済ませ、お茶を入れ10分ばかり僕に同席するのが常だった。

或る日彼女はダージリンのミルクティーを淹れてくれた。

僕の好物だった。

二人で静かに飲み終わると。

次の瞬間。

杏は僕にキスをした。それも唇に。

僕は拒むことが出来なかった。

ほんの5秒ほどであったが、僕には永遠に近い時間だった。

唇を離れた彼女に僕は、言うべき言葉を失っていた。

呆然とする僕を置いて杏は出口は向かい。

「お休みなさい。お大事に」

そう言って部屋を出た。

後には甘美な空気と、やり場の無いうつろな僕の想いが徘徊していた。

僕の心の城砦はあつとゆう間に陥落してしまった。

僕は杏に恋心を抱いてしまったのだ。

そして、綾女にも深い情愛の想いを抱いているのだ。

僕はラッキーストライクの100mソフトパッケージを取りだし火をつける。

この10年煙草はこれに決めている。同じラッキーでもBOXタイプとは味が雲泥の差だ。

そして煙を深く吸い込み吐き出すと、誰にと無く一人っきりの部屋で

「やれやれ」と言った。

僕は一体何処へ行こうとしているのか、皆目見当もつかなくなっていた。

8月の頃(3)(前書き)

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

8月の頃(3)

いつそ杏を抱いてしまえば良かっただろうか？

そうすれば僕らはいい恋人同士になれたかもしれない。

彼女はとても魅力的な女の娘だったし、僕を好いていてくれる。僕だって彼女のことは好きだ。

ただ僕には自信が無かった。

杏を愛せるかと言う。

愛する責任が持てるとは思えなかった。

だから今までも彼女とは距離を置いてきたのだ。

僕は彼女を失いたくない。

今のままでも十分過ぎるほど良好な関係なのだ。

もし僕が彼女の想いに答えることが出来たとして。

けれど其れはいずれ終わる関係なのだ。

僕は彼女のように健全で魅惑的な女の娘を守り通す力など持ち合わせていない。

そのことが良く分かっていいるからこそ今まで心を閉じてきたのだ。

それを彼女はこじ開けてしまった。

立った一度のキスで。

僕の心は立ち往生していた。

杏を想う気持ちと、綾女「エリス」に対する想いと。

どちらにも優劣など着け難かった。

綾女に対する想いは日増しに大きくなって行く。

決して彼女への同情などではない。彼女が健常者で無いことなどまるで関係の無いことだ。

僕は一人の女性として、綾女に情愛を抱いているのだ。

残念ながら明確な理由は僕自身にも解からない。

所謂、一目惚れとも言えいいのか。

もっとも彼女との出遭いは文字の上からだったが、それでもそうい

うことは有るのだ。

僕はどうすればいいのだろうか？

その答えは何時までたっても出そうに無かった。

僕に出来ることといえば、ただ煙草の煙を夜の中に吐き出すことだけだった。

愛を下さい（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

愛を下さい

あたしに

このあたしに

愛をください…

もう一人じゃ歩けない

もう一人じゃ生きれない

あなたはいつも

あたしの側で笑ってくれたね

あなたはいつも

あたしの隣で寄り添ってくれたね

ねえ、

一度、訊いてみたかったの…

「それは、愛ですか…？」と

ねえ、

一つ、お願い事をしてもいい？

愛をください
愛をください
愛をください
愛をください
愛をください
愛をください
愛をください
愛をください
愛をください
愛をください

と。

あなたはあたしに
愛をくれますか…

あたしの闇を埋める
愛をくれますか…

同情はいらない

憐情もいらない

欲しいのは
あなたの本物の……愛

欲しいのは
あなたの心からの……愛

それだけ……

此処にいる貴方
此処にはいないあの人
違うこと、やっとわかったの

あかし、淋しいの
あかし、泣きたいの

あかし、死にたいの

お願い

あたしを抱きとめて…

あたしを一人にしないで…

あたしを愛して…

あたしだけを愛して…

ねえ、

あたしね

1000回血で書いたんだよ

「愛をください」って

ねえ、

あたしね

1000回血で書いたんだよ

「愛をください」って

あなたはあの人と似てるひと

あなたはあの人と別のひと

でもね

だからね

あたしはあなたの愛が欲しい
あたしはあなたの愛で生きてみたい

愛をください
愛をください
愛をください

何回言ったら信じてくれますか
何回言ったら愛をくれますか

お願い

あたしには今
あなたしかいないの…

お願い

あなたまで
あたしを見捨てないで…
あたしを置き去りにしないで…

お願い

あたしに

こんなあたしに

もしもくれるものがあるなら…

あなたの心からの

愛をください

イカナイデ…

離レナイデ…

捨テナイデ…

もしも

あなたが迷惑でなければ

あたしに

「愛をください」

あたしがわかるまで
あたしが眠れるまで

愛を囁いて

愛を奏でて

愛を…

あたしのためだけに
愛を…

愛をください。

送れなかったメール。

あたしはどうしたらいいの？

徹を愛しているのに、あの人のことが気になって仕方が無い。

幾らと徹と同じ姿でもあの人は徹じゃない。

でも惹かれ始めてる。

いえ出遭う前から、あの人のメールに触れたときから惹かれていた。

徹はもう帰ってこない。

どんなに願っても。あたしの腕の傷をどれだけ増やしても。

徹は帰って来やしない。

でもあの人が現れて、徹が帰ってきたみたいだった。

あの人に会いたい。

もうあたしは一人ぼっちになってしまった。

あの人ならあたしの傍に居てくれるかもしれない。

会いたい。

でもこの身体。

思い通りに動かぬ手足。そして話すことも出来ないこの口。あの人

の声を聞くことの出来ない耳。

きっとあの人の重荷になる。

どうしたらいいの？

神様どうしたら？

それでも、会いたい。

傍に居たい。傍に居て欲しい。

それは徹に対する裏切りですか？

愛を下さい（後書き）

http://plaza.rakuten.co.jp/24j
ihat0jityaku/
24時着0時発……
>管理人MISS・Mさんの企画協力。作詩提供により執筆しました。

誕生日（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

誕生日

「アナタこの間あたしと20も歳が違うって言ったでしょう?」

「そうだったかな」

杏は相変わらず週に2日僕の部屋へ通って来る。

「言ったわよ。アナタあたしが愛と同一歳だってこと忘れちゃったの?」

愛と言うのは僕の以前の恋人で、杏の友人でも有った。

「忘れていたかもしれない」

僕は灰皿代わりのコーラの空き缶にラッキーストライクの灰を落としながら言った。

「結構冷たい人だったのね」

僕は答える代わりに煙を宙に向かって吐き出した。

「愛のことも忘れちゃったの?」

「忘れるはずがない」

僕は間髪を入れずに答えた。少し声が荒かったかもしれない。

「彼女のことは忘れられるわけがないよ」

「もし忘れられるのなら、毎晩不眠症に悩んだりはしない」

「でも今はエリスさんに恋してるわけね?」

「何故そう思うんだ?」

「エリスさんのことが気になって、それで胃に穴が空くほどお酒を飲んだんでしょう?」

「だから何で僕がエリスに恋すると、胃に穴が空くほど酒を飲まなきゃいけないんだ?」

「だいたい何時僕がエリスに恋をしたと言った?」

僕はいつになく強い口調になっていた。

あまりにも的を射ていたからだ。

「アナタはあんな無茶な飲み方したこと無かったじゃない? 何時も落ち着いていて月を見ながらゆっくり飲んだ。それがエリスさ

んに遭ってから急にあんな飲みかたになって」

僕は黙っていた。

「あたし今日で24歳になったのよ。知らなかったでしょう?」
杏は話題を変えた。

「今日?」

「そう、今日が誕生日なの。一緒に祝ってくれない?」

「ああ、ワインとキャンドルとケーキを買いに行こう」

「ううん。そう言うのじゃなくていいの。もっと簡単なことでもいい」

「どんなこと?」

「キスして」

大きな目を、一際大きく見開いて 杏は僕の目を見つめた。
吸い込まれそうな瞳だった。そして圧倒的な瞳だった。

僕は理性を無くして、杏の唇に自分のそれを重ねた。

「……」

僕らは唇を離れた。

「あたしアナタのこと好きよ。アナタはどう思ってるのかしら?」
今更ながらも、はっきりと告白されて僕はたじろいだ。

「僕も好きだよ」

そう言う以外にない。事実僕は彼女が好きだった。友人として。

しかもこの前の突然のキス以来、僕の恋心は揺れていたのだから
「でも誤解しないで欲しい。君のことは大切な、とても大切な友人

だと思ってる。

僕は君を失いたくない。だからはっきり言って恋人にはなれないよ。
今のキスはプレゼントだからね」

僕は慌てて弁解した。自分の本心に嘘をついて。

「愛とは付き合ってたくせに、あたしじゃダメなの? 同じ17歳違いじゃない」

「そう言う問題じゃなくてね……」

「やっぱりエリスさんね」

杏は断定的に言った。

「あたし諦めないから。愛よりアナタを愛してみせる。それにエリスさんよりもね」

そう言うとき杏は立ち上がり、ドアの方へ歩いていく。

ミュールを履きドアを開け、去り際に振り向いて。

「プレゼントをありがとう」

と少し意地の悪い顔で言った。

カチリとドアが閉まった。

A n n o t a t i o n (前書き)

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。 > b r < 前作を読み
たい方は、砂さらら か p u e r J a m で検索してみてください
い。又は以下の URL からどうぞ。 > b r < h t t p : / / n w .
u m e - l a b o . c o m / d y n a m i c / n o v e l / a / n
0 4 9 3 a / i n d e x . p h p

A n a t t e m p t

「お客様にご案内申し上げます。大変お待たせいたしました。当機は間もなく着陸いたします。シートベルトの着用をもう一度ご確認下さいませ」

9月29日僕はスカイマーク・エアラインズBC301便のC28番席に座っていた。

エリスは… 綾女は自殺未遂をしたのだ。

僕のポストにダイレクトメール以外が来ることはまず無い。

見なれない白い封筒が届いていた。

差出人に見覚えは無かったが住所が鹿児島島になっていたので、綾女の逗留先だと分かった。

封書が来るということは、綾女に何か起こったということだろう。

良い知らせではないと直感した。

僕は急いで封を切るとすぐさま読んだ。あれから、つまり もう一度連絡を取り合って欲しいとのメールの後、僅か1週間後のことだ。僕は綾女に会いに行くことにした。急迫3日の休みを取り飛行機の切符を取ったのだった。

鹿児島空港に着くと僕は花を買った。

白い百合の花束だ。変な花言葉は無いだろうな？

そう言うことをもつと知っておくべきだったかもしれない。

タクシーに乗り、手紙に書いてあった病院の名を運転手に告げた。

「希望ヶ丘病院」

するすると車は滑り出した

その病院は、空港から1時間30分ほどの所に在った

田舎にしては立派な病院だ。入院設備もとのつていいらしい。

僕は吉村綾女に面会希望を告げる。程なく病室番号を教えられた。

と言うことは峠は越したと言うことらしい。

部屋番号は「2046」どこかで聞いた番号だが思い出せなかった。

部屋に入ると付き添いに来ていた老夫婦が腰を挙げた。

僕は手紙を見せ自己紹介をした。

「遠い所をよう来らんさった」老婦人が言った。

「いいえ2時間ちよつとですよ。お構いなく」

そしてベッドに横たわる女性は点滴とマスクをされて眠っているようだった。

僕は呼んでみた。

「エリス」

綾女と呼ぶよりの好いと思ったのだ。

もう一度耳元で囁いてみる。

「エリス」

まだ薬が効いているのか意識はもどらないようだ。

僕は老夫婦からことの顛末を聞いた。

綾女はずいぶん情緒不安定となっていて介護士の 尽力も空しく、
どんどん悪化して行ったそうだ。

そしてついに綾女は抗鬱剤や安定剤。果ては風邪薬や眠剤を大量に飲んで、服薬自殺を図ったと言うことだった。

幸い命に別状は無かったが、夢遊病のように意味不明の行動を取るようになっていそう。

時折まともになることも有るが、その時はいつも悲しげに

「オーウ オーウ」

と唸りつづけ涙を流し 徹、徹と叫ぶようにしているそう。

僕は悲しくなってしまった。と同時に、徹に怒りを感じてしまった。もう彼女は十分苦しんだ。自分も障害を持つ身なのだ。もう成仏して忘れさせてやればいいものを。少し恨みがましく思ってしまう。

突然エリス「綾女が目を覚まして、僕を見ている。

「オーウ？」

彼女は叫んだ。

僕のことを徹だと思ったらしい。

僕は言葉を紡げなかった。

錯乱しているのだろう。しかし情緒的には落ち着いているようだ。比較的マトモな方のエリスだったのは幸いだった。

僕は黙っているしかなかった。

「徹お帰りずっと待っていたんだよ。どこにいったの？」

エリスはポータブルPCに打ちこんだ。

僕は老夫婦を見やった。

「そうだと、言ってやってくんせえ」婦人が懇願するように言う。

「遠いとても遠い所だよ。君に会いに戻ってきた。

君こそどうしたんだい？ 薬を飲みすぎたって言うじゃないか、なんでそんな馬鹿なことをしたんだい？」

「あなたを探していたから」

「僕はここに居る」

「安心したかい」

「徹、ずっと会いたかった。3年も待ったのよ」

「ごめん、色々忙しかったから。でももうこうして傍に居るよ」
「オーウ！」

彼女は肉声で言った。

僕は泣きながら彼女を抱きしめた。

他にどうする術も持たなかったからだ。

僕の涙は頬を伝いエリスの髪にポツリポツリとひとしずくづつつ落ちた。

A n a t t e m p t (後書き)

M I S S ・Mさんの企画協力。作詩提供により執筆しました。

リブレスメント(前書き)

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

リブレスメント

彼女を抱きしめながら僕は思った。

エリス「綾女の中には今は徹しか居ない。僕の存在など欠片も無いのだ。

彼女は僕を徹だと思いこんでいる。

綾女が今必要としているのは僕ではなく、徹に似た僕の存在なのだ。僕がダニエルであることを彼女は望んでいない。

僕はエリスの前では徹でなくてはならないのだ。

辛いことだった。

でも仕方が無い。エリスがそう望むのなら僕は徹であり続けよう。

僕はリブレスメント（代理選手）で構わない。

今現在はそれしか、彼女の役に立つことは出来ないのだから・・・

僕はエリスが一時的に、記憶を失っているのだと思った。

一番強く残っている徹のことを除いて。

結局その日は一日 病院に居た。

帰り際に彼女の保護者である老夫婦に、僕は一言訊いてみた。

「退院は出来るのですか？」

「ええ、多分あと1週間くらいだとお医者と言わんしゃったでねえ」
夫の方が答えた。

「僕には彼女が記憶を失っているように思えるんですが、医者はなんと云ってるんですか？」

「ようわからん言うちよりました。飲んだ薬が薬なだけにそう言うことも有るか知れんち言うちよりました」

「でもパソコンは使えてるわけですよ？ さっきやったように。だとしたら部分的に忘れていることになりますね？」

「そつだと思えます」

「治るかどうかは判らないんですか？」

「はあ。それもよう判らんらしいです」

「そうですか」

「じゃあ僕は明日と明後日に、また彼女に会いに来ます。今日はこの辺で帰ります」

「うちへ泊まっていきやつたらいいがね」

婦人が言った。

「有り難うございます。でももうホテルを取ってしまったんで、そこへ泊まります。」

ではまた明日」

そういつて僕は招待を辞去した。

外へでると快晴の空に、櫻島がもうもうと噴煙を吐いていた。

やはりここは鹿児島なのだなと、僕は意味も無く感慨にひたった。

自分の街から遠く離れてみて、初めて自分の居た場所が大切な場所だと思えるものなのだ。

そしてあの街には否も居るのだ。

そしてこの街には、僕があれほど求めていたエリス＝綾女が居るのだった。2度と逢えないと思っていたあのエリスが・・・

そして彼女は徹だけを求めて、求めつづけているのだ。

今日から彼女にとっての徹は僕だ。

彼女が僕が「徹でないこと」に気づくそのときまで、僕は徹なのだ。もう、エリスとダニエルではなく 綾女と徹なのだ。

僕は悲しくなかった。不思議なくらい悲しくなかった。

綾女がこんなことになってしまったのは、僕のせいかも知れないのに。

僕は彼女に逢えたことが嬉しかった。

それと同時に僕が彼女の中に存在しないことも知った。

それでも、僕が彼女のためにしてやれる事が出来たのだ。

それが嬉しかった。

明日から彼女のことをエリスでなく、綾女と呼ぼう。

そう決めた僕だった。

リブレスメント（後書き）

M I S S・Mさんの企画協力。作詩提供により執筆しました。

原因（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

原因

次の日の土曜日。僕は約束どおり、面会時間に病院へ行った。

綾女の部屋は他の患者と違い一般病棟の個室だ。

通常、精神病患者の病室は隔離病棟に有り、ベッドもテレビも無く窓さえも無い。

有っても細かく頑丈な鉄格子がはまっている。

そして、ひどい時にはモニターカメラが天井に貼りつき、廊下との境も壁ではなく、鉄格子で仕切られている。

まるで猛獣の檻の様にだ。

しかし綾女は、手足も不自由で車椅子の生活で、耳も聞こえず口もきけないので、一般病室での看護になっているのだ。

僕が部屋に入っていくと、先に来ていた高瀬婦人がベッド脇の丸椅子から立ちあがって挨拶をした。

「おはようございます」婦人が言った。

「おはようございます」僕も答えた。

綾女の保護者の老夫婦（といっても50代だが）の名は高瀬というのだった。

「様子はどうですか？」

僕は訊いてみた。

「今日はぼんやりしとりやあす。私が来てもわからん様子で」

綾女はベッドの背を起こされた状態で、窓の方を見ていた。首をかしげるようにして。

僕はベッドをぐるりと回って綾女の目線の前に立った。

反応は無い。目はうつろだった。

空中に何か凝視すべき物が有るかのよう、どこかの一点をぼうつと見たままだった。

僕はサイドテーブルに有る彼女のPCに目をやった。

「借りていいですか？」

高瀬婦人に訊ねる。

「どうぞ。私には使えんでねえ。綾女が自分で使うとるだけですけえ」

「じゃあお借りします。話かけてみたいので」

僕はそう言つて電源を入れた。しばらくしてデスクトップ画面が現れる。

と、そこに日記と名付けられたフォルダが有つた。

「すいません。この日記を読んでもいいですか？」

「ええと思います。お医者も見ましたから」

僕はフォルダの中の一冊新しい日付のファイルを開いた。

それは綾女が自殺未遂する前の日のものだった。

あたしは悩んでいる。あの人に会うべきか。

あたしの心には徹がいる。

徹のことを思うと今も涙が流れる。

あの事故さえ起きなければ、徹は今もあたしの隣に居たのに。

そう思うと、やるせなくて自分の腕を切ってしまう。

あたしが死ぬはずだったのに。

あたしが死ぬはずだったのに、徹はあたしのために死んじやった。

あたしが他の人を好きになるなんて許されるはずがない。

許されていいはずがない。

なのに何故こんなにあの人に会いたいの？

あたしはどうすればいいの？どうすれば・・・

やっぱりあたしは死ぬべきだ。

死んだほうがいいんだ。

父は死んだ。

徹も死んだ。

だからあたしも死のう。

そうだ。もう死んでしまおう。

そうすれば、もう悩まなくていい。

腕を切りつける必要もない。

優しくしてくれたあの人には悪いけれど。

あたしは生きてちやいけないんだ。

死んで徹のもとへ行こう。

父の所へ行こう。

生きててごめんなさい。

これは遺書だ。そして自殺の原因はやはり僕だったのだ。

綾女は徹への想いが、別の誰かに移るのが罪悪だと感じていたのだ。だから僕に会うことを一度は拒絶した。

しかし父親が死に、再度僕に連絡をしたことで（これは僕の推測だが）

その罪悪感に捕らわれたのだろう。

彼女をそこまで追い詰めた、その責任は僕に有る。

僕が会いたいとさえ言わなければ、綾女はこんなことにならずにすんだのだ。

僕は高瀬婦人に言った。

「彼女をこんな風にしたのは僕のせいなんです。ここに書いてあります。

僕が彼女を追い詰めてしまったんです。本当に申し訳ありません」
途中からは涙声になってしまった。

そして言い終わらないうちに涙は溢れた。

「そうご自分を責めんで下さい。起きたことは仕方ないですけえ」

婦人は優しく言ってくれた。

けれど、それで僕は慰められたりしなかった。

死んでしまいたい。そう思った。

今まで何度も死のうと思ったことはあった。愛が死んでしまったときもそうだった。

それ以後も実際に首にロープをかけたこともある。

だがそれは全て自分自身のことに関した感情だった。

今回ののは最悪だ。

愛の時と同じように最悪だ。

僕が綾女に関心を持ったばかりに、僕は綾女を自殺に追い込んだのだ。

未遂に終わったとはいえ。

事故で恋人と身体の自由と言葉と音を失い、そして。

綾女は今、心まで失おうとしている。

それも僕のせいだ。

死ぬべきは僕のほうではないのか？

涙が止まらなかった。

声こそあげなかったが、僕は立ち尽くしたまま一時間近く泣いていた。

高瀬婦人は困ったような、悲しいような顔で何も話せずに居た。

「死んじゃダメ」どこからかそう聞こえた。

気がつくとか誰かの手が僕に触れていた。

「オーウ、オーウ、アウアアエ」

綾女だった。いつのまにか正気になっていたようだ。

「徹、泣いちゃダメ」

そう言っているように聞こえる。

僕はいつそう悲しくなつて嗚咽を漏らした。

「綾女。ごめん。綾女。ごめん。あやめ」

そう言いながら僕は彼女にすがっていた。

最後は言葉にならなかった。

綾女は動く方の手で、僕の頭を優しく撫でた。
幾度も幾度も。

僕の涙は、よりいつそう激しく流れた。

原因（後書き）

M I S S ・ M さんの企画協力。作詩提供により執筆しました。

決心（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

決心

僕はすっかり泣き尽くしてしまうと、ある思いが胸に浮かんた。僕は綾女を守らなくてはならない。

この街へ来よう。そして彼女の傍に居よう。

それが僕に出来る唯一のことだった。

「高瀬さん。僕、この街に来ます。そして彼女の傍にいます。近いうちに引越してきます」

「そんな無理をなさらんでもええです。この子は私達が面倒みます
けえ」

「いえ、僕には責任が有るし、彼女は僕の存在を求めています。徹君の代わりに」

「きつと、そのことで役に立ちます。僕に責任をとらせてください」
「はあ…」

婦人は困惑していた。恐らく赤の他人に押しかけてこられても迷惑なのだろう。

でも、僕も譲るわけに行かないのだ。これ以上綾女を苦しめたくない。

綾女が僕を徹と思っている以上、回復の可能性は有るはずだ。

トラウマの浄化に役に立つかもしれないからだ。

結局その件は一度帰ってから、再度お願いすることにした。

次の日の夕方。僕は再び機上の人となった。

そしていつもの街に帰ってきた。

夕方の7時にアパートに着いた。

ドアの前にはひとりの女性が立っていた。

杏だった。

しまった。留守にすることを伝えていなかった。

僕は何気ない風を装って

「よう、こんばんわ。まあ、入れよ」

そう言つてドアの鍵を開けた。

部屋に入るなり杏は

「何処に行つてたの？」

まるで詰問だ。

「うん、ちよつと急に友達のところに行く用が出来てね」

「嘘よ、エリスさんに会つて来たでしょう」

まったくどうして余計な勘が鋭いのだろう、女って奴は。

「違うよ」

「嘘」

「じゃあ、そうだ。綾女のところへ行つて来た。これでいいかい？」

「会つて嬉しかった？」

「あのな、彼女は自殺未遂したんだ。その見舞いに行つただけだ。

何かいけないことがあるか？」

「自殺未遂？」

「そうだ、しかも原因は僕だ。行かないわけに行かないだろう？」

「アナタが原因？」

「僕も行つてみて判つたことだ」

「どういうこと？」

「説明が難しい。できれば話したくない」

杏は黙つた。そして険しい顔をして僕の部屋を出ていった。

やれやれ助かった。このまま問い詰められたら気が滅入ってしまう。

杏のことは今までどおりの関係で居たい。

彼女は僕を愛すると言つたが、僕にはそれに答えることはやはり出

来ない。辛いけれど。

そして僕はこの街を離れる決心をしたのだから。

13 (前書き)

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

まったく彼ときたら嘘ばかり。

あたしは「好き」ってちゃんと言ったのに。

「僕は君の恋人にはなれない」なんて言っちゃって逃げて。ホントはあたしのことが好きなくせに。

そのくらい判るんだから。

あのエリスって娘がいけないの。

彼はあの娘に同情しているのかしら？

でも、それだけでも無い気もするんだよね。

彼は鬱病だし、彼女はあんな身体で手首を切ってるし。おまけに自殺未遂なんて。

ずるい。

彼の弱いところに付け込むようなことばかりじゃない。

彼はあたしが、手首を切ったら愛してくれるのかしら？

あたしのほうが彼を幸せに出来るのに。

それも圧倒的に。

どうしてあの娘がいいの？。

全く判らない。男って。

だけどあたし、彼のどこが好きなんだろう？

多分いつも悲しげで、そして他人に優しくなるうとする。

彼は自分が優しくないことを知っているから。

そんなところが好きなのかもしれない。

彼のホントの気持ちが知りたい。

僕は決心はした。

綾女を少しでも救いたい。その想いに嘘は無い。

それにしても杏だ。

彼女の何をどうする？

僕は彼女の誘惑に負けて恋心を起こしてしまった。

今彼女を失うのは正直とても辛い。

愛してやれないことが更に辛い。

だが綾女への想いは、もはや愛に変わりつつある。

たとえ彼女が僕を「僕」だと思っていなくても。

じゃあ杏への気持ちはどうなのだ。

正直に考える。

彼女に対しては、青春時代の恋と同じ想いを抱いている。

出来ることなら彼女と恋人同士になりたい。

ただそれはあくまで恋なのだ。

もしそうなれば僕は杏から色々なものを奪うだろう。

杏が自由に出来る色々なものを。

人間関係の再構築もさせることになる。

そして束縛をするだろう。

恋特有の現象だ。

それに引き換え、僕には杏にあたえてやれるものが何一つ無い。

僕の時間は仕事に8割がたとられているし、この街に居る以上それを変えることは難しい。

時間が無いと言うことは、会って彼女のために尽くすことも出来ないということだ。

もっとも僕がそれほど優しい人間なら、「愛」のことだってもっとちゃんとしてやれたはずだった。

だから…

僕は怖いのだ。

彼女は「愛」の友人だったし、僕にとってもかけがえのない友人だった。

この間、唇を重ねるまでは。

その関係を失ってしまうのが怖い。

それと同時に、杏のような素敵な女の娘を手に入れたという想いも確かにある。

自分に嘘はつけない。

綾女を愛しながら、杏を愛することが出来たなら…

僕がずるい男の本性を現せば、それは可能なことだろう。

愛とは一人限りに向かって発せられる感情ではないからだ。

杏に対する拒絶の言葉は、本当は全部嘘なのだ。

僕の心に少しだけ残っていた良心が、そうさせているのだ。

いったい僕はどうしたいのだろうか？

身勝手な奴が、いい人ぶっているからこんな思いをするのだ。

まるで自らの足で13階段を登っているようだった。

僕の二人に対する想いは、迷宮をいつまでも彷徨って居た。

出口の無い迷宮を。

杏の帰り道をほの紅く照らすのは、十三夜の月だった。

13（後書き）

もし読んでいただけたなら批評、批判、感想、採点などお寄せ下さい。必ず読みますのでお願いしますm（――）m

暴行（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

暴行

このところ鬱が重い。

何もやる気が起きない。

食事も摂るのが面倒だ。話もしたくない。

精神安定剤をオーバードースする。

5倍量だ。

職場に欠勤の連絡を入れることだけでも、僕は渾身の精神力を必要とした。

やがて薬の効果で、意識が蒙昧としてくる。

身体も少しだけ痺れてくる。

やがて眠りに落ちた。

眠りの中で僕は女を抱いていた。

若い20代の女の感触だった。

ショートカットの髪型ががようやくわかるくらいで、顔は見えない黒い影になっている。

僕は眠りの中だということを分かっていた。

だから欲望のおもむくままに、実生活では絶対しないようなことをした。

無理やり服を剥ぎ取り、乱暴に身体をベッドに押さえつけた。

そして耳、頬、唇そして胸元へ唇を滑らせ舌を這わせた。

女は弱々しく抵抗しつつも、その気になっているのが分かる。

喘ぎ声が聞こえる。

しだいに顔と身体の輪郭がハッキリしてきた。

唇を重ねようと女の顔に目をやった瞬間。

僕の意識は覚醒した。

そこは眠りの中ではなかった。
現実の僕のベッドだった。
そして女の顔は…

「杏?!」

僕は驚愕と戦慄を憶えた。
彼女に掛ける言葉が無い。

しかし何も言わないわけにもいかない。

「ごめん、本当にごめん。だけど一体僕は何をした？」
なにがどうなってこんなことになった？

意識が朦朧としていた時のことは思い出せない。
気がついたらこうなっていた。

「いつものように様子を見に来たのよ。そしたら眠っていたアナタ
が突然、凄い力で押し倒したのよ」

杏は涙ぐんでいた。

「なんてこった!」

僕はうろたえた。自責の念に駆られて。

いくら薬を飲んでいたとは言え、なんということをしでかしたのだ。
最も失いたくない女性を、ラリって襲ってしまうなんて。

最低だ。救いようが無い。

「済まない。ごめん。言う言葉が他に見当たらない。まさか最後ま
で？」

杏は黙って首を左右に振った。とても弱々しく。

「傷つけてしまったことは謝る。謝って済む問題ではないけど、と
にかくごめん。訴えるならそれでもいい。それだけのことをしてし
まった」

「もうここへ来ない方がいい。もう僕は獣になってしまった」
僕は彼女に服を渡した。ブラウスのボタンが二つちぎれていた。

彼女は淡いピンクのカーディガンでその部分を隠した。

僕はそれを見て、深く深く落ち込んだ。

杏は涙を拭って、化粧を直した後黙ったまま部屋を出ていった。

僕はそれを見送った後、抗鬱剤を3倍量飲んだ。

僕は最低だ。

最低の男だ。情けなくて僕はまた死んでしまいたくなった。

僕に出来ることといえば眠剤を過剰投与し深く眠って、この身体を動けなくすることだけだった。

暴行（後書き）

もし読んでいただけたなら批評、批判、感想、採点などお寄せ下さい。必ず読みますのでお願いしますm（――）m

激しい雨（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

激しい雨

「想いでは悲しみに満ちている。」

僕はベッドに横になり、天井の一点を凝視していた。部屋の灯りは消さずに抗鬱剤と睡眠剤を過剰摂取して、お気に入りの映画音楽をヘッドホンで耳から注入していた。もちろん聴くためではない。意識を外界から遮断するためだ。

僕の脳裏には想いでが巡っていた。「愛」とのこと。杏とのこと。そしてたった今、辛すぎる想いでを僕は産み出してしまったばかりだった。

とても悲しい出来事だった。しかし、それを犯したのは まぎれも無い僕自身なのだ。

杏。僕は今君を失おうとしている。いや既に失ってしまったのかもしれない。

もう、この街に僕のいるべき理由はない。

今の僕に出来ることはこの街を去ること。杏の世界から消えることだ。

僕はこの街から逃げ出すことを決めていた。

僕は卑怯者だ。自分の罪から逃げ出そうとしているのだ。でもそれが僕なのだ。

それに、僕には気がかりな人が居る。

綾女。彼女の傍に居たい。

それは切望と言って良かった

僕の中で彼女の存在はどんどん大きくなって行く一方だった。

僕は彼女のために出来ることを探していた。

残念なことに今、僕には何の力も無いのだ。それが悲しかった。それでも僕は彼女への想いを消すことはできなかった。

彼女の居る街へ行こう。一刻も早く。

その思いだけが僕の中で、幾度も幾度も繰り返されていた。

巡る悲しい想いの中で、眠りは一向に訪れなかった。

そして夜はいつまでも空けることがないように思えた。

窓の外はいつのまにか冷たい雨が、いつからか激しく降り始めていた。

そしてその雨は僕の心の奥深くに、やはりとても冷たく降りしきっていたのだった。

激しい雨（後書き）

もし読んでいただけたなら批評、批判、感想、採点などお寄せ下さい。必ず読みますのでお願いしますm（――）m

鹿兒島へ（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://id7.fm.jp/13/suna/>

鹿児島へ

空港へ降りたつても雨はまだ降り続いていた。あれから3日も経つというのに。

季節はイチヨウ並木や公園や森。

そして山々の樹木をすっかり紅や黄やだいたい色に染め上げ、いつまでも緑色の常緑樹を　舞台から追い出そうとしていた。

そして雨は、夏が完全に過ぎ去り。

秋というシーンへ移り変わって行く様を効果的に演出していた。

こんな南の国にも、秋はやってくるのだ。そして冬もいずれ来る。

2度目の鹿児島だった。行く先はもちろん、綾女の居る「高瀬　宅」だ。

僕は羽田で買った菓子折を下げてタクシーに乗り込んだ。

「隼人町の高速の入り口の方へ行ってください」

運転手にそう告げ、タバコを吸ってもいいか訊いた。

「どうぞ　どうぞ。ここはタバコの産地で有名な町もあるんです。

お客さまのタバコもきつとそこで作られとつとでしょう」

彼はそう言つて、ふおおふおと笑つた。

「雨が降り込まんくらいに窓を開けとつて下せえ」

僕は礼を言つて窓を1cm程開け、ラッキーストライク・ロングをチノパンツの左ポケットから取り出した。

ソフトパッケージのそれはS字に起用に折れ曲がつていた。ちよつとした美しさだ。

僕はその曲がり具合を十分堪能してから、イムコのステンレス製オイル・ライターで火を着けた。

それにしても。ラッキーストライクが鹿児島で作られているなんて話は初耳だ。

輸入タバコの葉で作ってるんじゃないのか？

そんな疑問を確かめる間もなく彼は話し掛けてきた。

「お客さまは初めてかごつま（鹿児島）に来らんさったとね？」

「いえ2度目です」

「そうですか。よかところでしょう？山には温泉も有るし景色も良い。海も有るし、なんと言っても櫻島の美しさはなかなかのもんですよ。お国自慢が始まった。

僕は、ええとか そうですね とか、適当に相槌を打ちながら聞き流していた。

いつしか雨は上がり、暖かな陽光が差し始めている。

空港から綾女の町まで小1時間かかる。その間中、彼のお国自慢はずっと続いた。

僕は相変わらず上の空の相槌を打ちながら、綾女の事を考えていた。

彼女は今、どうしているだろう？

やはり1日中、夢遊病のように宙を見つめ続けたり、あらぬ所へ出かけたりして あの方婦を困らせているのだろうか？ それとも少しは病状は回復しているのだろうか？

僕がそんなことを考えている間に、車は目的の隼人町に入り国道の大きな交差点に差し掛かっていた。

「スイマセン。ここを左折して100mくらい行ったら止めてください」

おはら節を唄っていた運転手は歌を辞め

「ハイ分かりました」

と言った。車を降りると雨はすっかり上がっていた。

路地を左に折れ1分程歩くと高瀬宅へ着いた。

門扉のない門を抜けると、家庭用の畑がありその間を通ると小さな前庭がある。小型車が一台止まっている。

「こんにちは」

大声で挨拶をしながら中の方へ入って行くと、母屋の裏から

「はい」

と言う声がして、高瀬婦人が出てきた。

「まあ、あんたよう来んさったねえ」

この地方独特のイントネーションで婦人は微笑みながら言った。

「こんにちは、またお邪魔に来ました。突然ですいません」

僕は菓子折を差し出し、頭を下げた。

「いいやあ気になさるんでもええです。よう来んさった」

「綾女さんはどうしていますか？」

「今ねえ、雨も上がったで裏庭で日向ぼっこをさせとつとです。今日は落ち着いとりやーすで、会って顔を見せてやって下せえ。きつと喜びますけえ」

「ありがとうございます」僕は婦人について裏庭へ向かった。

日当たりの良い南西向きの庭は、金柑やボントンの木が植えてあり実を着けていた。

左手の畑には野菜のほかに、見事な背の高い菊の花が20本ばかり咲いていて、白 黄 紫などの花びらと葉の上に、先程までの雨粒を載せていた。

それらは日の光を浴びてキラリキラリと宝石のように煌いていた。それに包まれるように綾女は居た。

僕は徹（前書き）

この物語は前作 p u e r J a m の続編です。

前作を読みたい方は、砂さらら か P u e r J a m で検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。

<http://id7.fm.jp/13/suna/>

僕は徹

綾女は車椅子に乗り、口に幼児用のオモチャを咥えていた。

タバコのコーンパイプのような、赤いビニール製のパイプの先に黄色いバスケットがついていて、その中に同じ黄色の玉が入っている。息を吹き込むと玉が宙に浮かんで踊り、息を止めるとバスケットの中に玉は落ちてくる。

恐らく2〜3歳児向けのオモチャだ。

黄色い玉は宙で踊っては落ち、回っては落ちを繰り返していた。

綾女は無感動にそれを見つめながら、一心不乱と言った様子でそれを吹いていた。

ふいに宙に浮いた玉がパイプのバスケットに入らずに地面に落下した。

そしてコロコロと転がり、歩いていた僕のテニスシューズの先で止まった。

綾女はその黄色い玉を悲しげに見つめている。

僕は玉を拾い上げ、綾女のそばへ歩み寄った。そして玉の水気をチノパンツの太ももの辺りで拭き取りパイプのバスケットの中に戻してやった。

そして

「綾女」

と声をかけてみた。

しかし、彼女の眼には僕は映っていなかった。

綾女は虚ろな眼のまま、再度パイプに息を吹き込むのに夢中だった。

「今日は朝からずっとそれをやっとつてねえ」

高瀬婦人が言う。

「そうですか」

僕は綾女の正面にしゃがみ、見上げるように彼女の顔を見つめた。

そしてもう一度、ゆっくりと

「あやめ」

と呼んでみた。

彼女はパイプを吹くのをやめて、何かを探すようにとてもゆっくりと、視線を宙のあちこちに泳がせた。そして数分後に僕の顔に視点がたどり着いた。

しばらくの間、彼女は僕の顔をじっと見ていた。

僕も彼女の眼を見つめつづけた。

ハッ、としたように彼女の顔に表情が浮かぶ。

ようやく彼女は意識を取り戻したようだ。

「オーウ。オーウ」

僕は立ち上がり彼女の両肩に手を置いて

「綾女、僕だよ。徹だよ」

やはりゆっくりと声をかける。

弾けるように彼女の右手が僕の腕をつかみ、ひときわ大きな声で

「オーウ」

と叫んだ。僕は彼女の車椅子の背に掛けられたバッグからポケットPCを取りだし、スイッチを入れメモ帳を開いて文字を打ちこんだ。

「綾女、また会いに来たよ」

そして彼女のひざの上にPCを置いた。

彼女はそれを見ると、唯一動く右手でキーを打ち始めた。

「どこにいったの？ずっと待ってたのよ？」

「ゴメン。仕事で遠くに行ってたんだ。でももう大丈夫だよ。僕はこの町で暮らすことにしたから、だからいつでも会いに来られるよ」

「もうどこへも行かない？」

「ああ、どこへもいかない」

「会いたかったのよ。ずっと」

「毎日会いに来るよ」

「本当に？」

「本当だよ」

綾女の表情が笑顔に変わった。

やはり、彼女には徹が必要なのだ。僕は確信した。

僕が徹でいる限り彼女は淋しい思いをしなくて済むのだ。それに、

意識がよみがえる時間もそのぶんだけ長くなるはずだ。

僕はこれからずっと、彼女のために徹で有りつづけよう。

リプレースメント（代理選手）ではなく、現在進行形の 本当に生

きている徹になるのだ。

そう改めて心を固めたばくだった。

役作り（前書き）

意欲とアイデアが無くて休筆してあ居りました。 すいません。 マダ
本調子で無いので次話も何時になるかは・・・
気長にお付き合いたいだければ幸いです。

役作り

11/19日僕は高瀬婦人に頼んで、綾女のアルバムをみせてもらっていた。徹と綾女の写真だ。

わずか6年間の間に撮りためられたそれは、A4サイズで10冊を超えていた。そしてそこには、常に笑顔の綾女と照れくさそうな表情で、今にもソツポを向きそうな表情の徹が写っていた。どの写真もそうだった。その中にいくつか、一人づつのスナップがあった。

僕はその中から一枚。最も最近に撮られたと思われる、徹の写真を数枚抜き取った。顔のアップ。バストショット。全身のフアッションが判るような数枚だ。

それを携えて、僕は鹿児島で一番有名なヘアメイクデザイナーの店に向かった。列車で1時間ほどそして繁華街のほぼ中心に有るその店まで歩いて15分といったところだ。予約をしていなかったのに断られたが、何時間でも待つからと頼み込んでようやく店に入ることが出来た。3時間ほど待つて。

やっと席に案内された。幸いな事に僕の髪の毛の長さはデザインするのにちょうど良くくらいに伸びていて、ヘアメイクさんに見せた写真の数枚からも、同じ髪型にデザインできるといふ返事をもらった。

徹は、どこかアジア系の映画俳優の髪型を少しワイルドにくずし、赤みがかかったむらの有る茶色に染めていた。僕にとって髪を染めるなど今までの人生に無かったことだ。ヘアメイクさんは数時間で注文通りのスタイルを見事に再現した。僕は満足し

「ありがとう」

と礼を言った。ヘアメイクさんは

「お客さん、もしかして役者さんですか？」

と訊ねてきた。

「3流ならまだましかけど、数秒間だけ出てくるチョイ役で台詞も無いよ」

と僕は嘘をついた。

「でも、手を抜くわけにはいかないんだ」
彼女は

「解かりますよ。私たちもそう、手を抜くわけにはいかない」

「お互い苦勞が絶えないね」

「全くです、頑張ってくださいね」

と、儀礼的とも本心とも判りかねる口調でキャッシャーに向かった。

繁華街で一番大きいファッションビルの中で、僕は右往左往していた。徹と同じような服を買うために来たのだ。しかし僕はいつもスパーの衣料コーナーの売れ残りや、安売り屋の数百円の服しか買った事が無いので。こういう所に来ると途惑ってしまう。徹は中々の洒落者だったらしく、僕の服とは天と地ほどの差が有った。写真を頼りに似たような雰囲気売り場に行つて、店員に声をかけて見る。

「こんな感じの服が欲しいんだけど、あるかな？」

「ああ、何年か前に流行つたタイプですね、今は同じモノは無いと思います」

「そうですか」

「ただ、こういったセンスの方が好む売れ筋はありますよ」

「いくつかコーディネートしてもらえますか？」

「ええ、最近はこれなんか売れてますね」

「そうだな、これならこのシャツとパンツに、ブルゾンか皮コート」

「ヨーロッパなタイプが良いんじゃないですかね？例えばこの、胸から腰を絞つて裾が広がるタイプ」

「それからこの、ライトベージュのロングコート。ブーツに良く合いますよ」

そんな会話というより一方的な勧めによって、着まわしのききそうなモノを選んでもらつて着ほどの買い物をした。お陰で僕のカードの借り入れ金額は、大したものになつてしまった。

僕は直ぐさま、試着室で買ったばかりのファッション（僕にとっては既に服などという気軽な代物ではなかった）に着替え今まで着ていた服をトイレのゴミ箱に捨てた。

そしてその足で、僕は綾女の居る「高瀬宅」へ戻った。時刻は16時を過ぎ既に陽は傾きを始め、陽射しも黄色がかった。

秋と言うより、冬の気配が色濃くなった庭に綾女は居た。色とりどりに咲いた高瀬氏が丹精こめたご自慢の菊の花を一つ一つ丹念に見つめていた。今日は意識が安定しているようだった。もっとも何時崩れるか分からない危うさは隠されていなかったけれど。僕が傍に立ち彼女の肩に手を添える。

綾女は軽く振り向き、微かに微笑んだような表情を見せた。しかし僕の思い過ごしかも知れない。

その後我々は、夕陽が完全に紅色に染まり、夜の境界線がセルリアンブルーのグラウンダーションを徐々に積み重ねて。そして冷たい陸風が海の方へ吹くまで、まるで風景の一部になったみたいに、その場所にたたずんでいた。

空は半月と、いくつかの1等星以上の明るい星が幾つも瞬き始めていた。

TAXI にて

ミニ・リパートのLoving youが聞こえている。ハツとして僕は布団を蹴り上げる。

そして今が朝だということに気づいた。それにしても安民宿で、朝からミニ・リパートのLoving youが流れているのはどういうことだ？

音楽は僕の上着のポケットから聞こえていた。僕の携帯電話だった。「もしもし？」

電話は高瀬婦人からだった。

「綾女が今朝起きてこんようになってしもつて、今救急車で運ばれて行ったところです。」

早よう知らせとかんといけん、と思うたけえねえお電話しとるんですわ」

「何ですって？それでどこの病院に運ばれたんですか？」

「いつも通つとところです。国分の希望が丘病院へねえ。で、うちの人と一緒に乗って行つとります」

「知らせて頂いてありがとうございます。僕もこれから向かいますので」

それだけ告げると僕は直ぐに着替えをすまし、髭も剃らずに宿の玄関を飛び出した。

そこから駅前のタクシー会社に走り、急いで車を出してくれるよう頼んだ。

ここは大きな街の駅ではない。タクシー乗り場にタクシーは停まってなんかいないのだ。

タクシー会社の砂利の駐車場には2台だけ車があつた。そのうちの1台が路上に出てきて後ろのドアが自動で開く。僕がドアをくぐろうと右手をシートに着いたとたん、僕の体を座席の奥に押しやって一人の女性が乗り込んできた。

彼女は黒地にやはり黒いレースをあしらった、まるで中世貴族の服とどこかロリータ的ファッションを合わせてデザインしたような膝丈のワンピースに、やはり黒の網タイツと黒のエナメル編み上げジャングルブーツを履いていた。ただしブーツのソールは7cmほどの厚さをもっていた。啞然としている僕を無視して、彼女は僕が口を開く前に運転手に病院の名を告げていた。彼女は真っ直ぐ前を向き僕の隣に座っていた。背中までの長さに綺麗に切りそろえられた髪型のせいで、横からも彼女の顔は見えなかった。

僕は呆けてしまい、ああこういうのがゴシックロリータとか言うファッションなんだなあと本来の目的とも今起きた現象とも無関係な事を考えていた。

「久しぶりね」

その声が耳に届いた瞬間。僕は我に返り、同時に彼女が何者かを悟った。

彼女は「アヤメ」

吉村綾女の分身。ドッペルゲンガーとも言われる現象的存在だ。

「あたしと見に行った映画、憶えてる？」

「うん」

「端的に言つとね、綾女。そろそろ危ないのよ。もうほとんど時間が無いの。つまり綾女の寿命が尽きるまでのことよ」

「医者は肉体的な体力は十分健康だと言ってるそうだよ？僕はそう聞いていた」

「お医者？じゃあその人は、あたしが綾女のドッペルゲンガーだって言ったらどうするかしら？綾女を救う方法が、あたしと関係があると理解できるかしら？」

僕は黙っていた。

「早くしないと、あたしと綾女はこのまま分離し続け 時間切れになれば綾女の命は尽きるわ」

「もつとも、そうなればあたしも消えるけれどね。うふふ」

「僕なりに考えていたことなんだけど、訊いていいかな？」

「どうぞ？」

アヤメは促した。

「君が僕の前に現れたってことは、綾女は今意識不明ってことかな？」

「そう」

「綾女が目覚ませば君は消える？」

「そう」

「君と綾女が一体化すれば綾女は助かる。そう考えていいのかな？」
「正解」

「そこで問題点は、どうすれば君達は一体化できる？ってことなんだけど」

「あなた知ってる筈でしょ。あの映画、最後まで見ていたならね」

「見ていたさ、君に言われた通りね。内容だってちゃんと覚えてる」

「だったら今年中に実行して、それがタイムリミット」

「今年中？今年中しか君たちの時間は無いのか！」

「このままならね」

「けど、今綾女は病院だし。外に出られるようになるには時間が必要だろ？それに出不然ない可能性だって・・・」

「そこまで言つと僕の口は動かなくなった。あまりに不吉に感じたからだ。」

「今回はまだ大丈夫よ。ただ、ただもう一度倒れたら・・・多分あたし達は、それまでね」

彼女は「あたし達」と言った。それはもちろん僕と彼女のことではなく、今隣に居るアヤメと現実の人間としての綾女のことだ。

「僕は彼女に新しい想い出を作ってやりたかったんだ。見てくれよこのカツコウ。僕は徹になって綾女に、彼女に昔の心を取り戻してやりたいんだよ」

「それが偽りの想い出であつたとしてもね。僕は彼女にあの、爛漫とした笑顔が戻るなら いつまでも徹を愛し続けていても構わないと思つてゐるんだ」

「それはそれとして、善いことかもしれないけど どちらにしても今年一杯に実現させなければタイムオーバーでゲームセットよ」

クソッ！ 僕は胸の中で叫んだ。そして少し考えてからアヤメに訊ねた。

「ひとつ訊きたいんだけど、綾女は君の姿を見たことがあるんだよね？」

「だけど君が僕の前に現れるのは決まつて彼女の意識がないときだ。なのにどうやって綾女は君の姿を見ることができたんだろう？」

「彼女があまりにも強く自分の死を願い想像したからよ。徹に対する色んな思いからね。自責、喪失感、他にもいろいろね。そしてそれが原因で彼女は自分の精神的分身を実体化させてしまった。それが、あたしね」

「彼女が自分の部屋の姿見、つまり鏡よね。それを何だつたかな、んー そうガラス製の重い写真立てを投げつけて割つた時よ。あたしは彼女の前に立っていたの。」

彼女は直ぐにあたしが自分の分身だつて悟つたわ。そして怯えもしなかったし、驚きもしなかった。それが最初で最後のあたし達の出逢いだつたわけ。そのあと数十秒で綾女は意識を失つてしまったしね」

僕は黙つたまま目線で続きを促した。

「それ以降彼女はあたしを見ることはできなくなったの。だって物凄いいエネルギーが必要になるはずだもの。つまり現代科学で実現できないほどのエネルギーよね？それが、か弱い女の娘 しかも重症の障害を持った怪我人よ？」

そのたった一人から発せられるなんて信じられる？

言わば超能力を持ってしまったのよね、彼女は。だから彼女の意識が少しでも実体に残っている時は、あたしは出現できない。そういうこと。理解できる？」

「多分理解したと思う」

やれやれ。まるでSFだな。と、僕は内心思わずに居られなかった。しかし、この世界はまぎれもない現実で、僕は今こうしてアヤメと話している。

そしてアヤメは、よく言われている「ダブル」「ドッペルゲンガー」の伝説や噂と違って、本体である綾女を救うために 僕の前に姿を現しているのだ。

事態は明白だった。

これは彼女達からのSOSなのだ。

綾女が僕を必要としているのだ。（もちろんアヤメも）
ならば僕の為すべきことはいったい何だ？

考える！考えるんだ！

僕の頭はガンガンという音が響き痛んだ。まるでドラム缶に閉じ込められて誰か大勢にバットで周りをたたかれているようだった。

気がつくとタクシーは病院の車寄せに着いていた。

病院（前書き）

この物語は前作 puer Jam の続編です。 >br< 前作を読みたい方は、砂さらから puer Jam で検索してみてください。又は以下の URL からどうぞ。 >br< http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>br<

病院

アヤメは乗った時と同じように、スルリと車を降りた。僕は料金を支払いアヤメに続いた。

「君はどうする？まさか病室には行けないだろう？」

「ロビーに居るわ」

そう言うとスタスタとベンチに向かった。僕は一人で受付に行き、救急車で運ばれた吉村綾女の部屋はどちらかと訊ねた。

しばらくして「1224」という部屋番号を伝えられた。僕は礼を言つて病室へ向かった。

ドアは開いていた。中に居た高瀬氏は綾女の手を握つてうなだれていた。

「失礼します」

彼は顔だけをこちらに向け

「ああ、来てくれよったですか。もう急なことで私らも驚いよったです」

「どんな具合なんですか？」

「命には関わるほどではないちゆうて聞いてホツとしたところです」

「よかつた」

「意識は戻るんですか？」

「今ところはお医者にも判らんらしいでねえ」

「そうですね。それで原因は何か有つたのですか？」

「はあ なんでも発作みたいなものだとお医者が言つて、ただ体力がかなり落ちとるて言いよつたです」

「そうですね」

「僕に何か出来ることはありませんか？」

「はあ ありがたいこつてすが、私らも何もしてやれんありさまで
・
・」

彼は不安げに綾女を見つめ、そこで言葉は途切れた。

シンとした空気が流れた。綾女の腕には点滴がポツリ、ポツリと流れていた。

1分ほど経っただろうか。僕は彼に

「分かりました。僕にお手伝い出来ることが有ったら、いつでも電話を下さい。」

まだしばらく鹿児島に居ますので。よろしくお願いします」

「お世話をかけてすまんこつてす。分かりやした。そうさせてもらいますでえ」

「では今日はこれで失礼します」

そう挨拶して部屋を出た僕は振り返ってドアに手をかける。と。部屋番号が目に入った。

「1224」

カチリと音がしてドアが閉まった。

僕はロビーに戻るとアヤメを探した。

場違いとも言える服装のおかげで一目で彼女を発見できた。

アヤメはベンチの側にある水槽を見ていた。

中ではネオンテトラが青く光りながら泳いでいた。

透明で背中がうつすらと青いメダカくらいの魚だ。

透き通った体は体内の骨や、わずかな内臓をも覗かせていた。

まるで病院に居る人々の生命を象徴するかのように、淡く脆くそしてはかなげだった。

ただ、光るその体は 命を燃やしているように僕には見えていた。

「ただいま」

と声をかけるとアヤメはいきなり

「じゃあ行きましょう」

と言うと来た時と同じようにスタスタとロビーを横切り自動ドアを出ていってしまった。

あわてて後を追う。

小走りに追いつくと

「行くつてどこへ？僕は君と話したいことが幾つもあるんだよ、まだ」

アヤメはそれには答えず。

「タクシー呼んでくれない？」

「ああ、そうだね」

僕はロビーの公衆電話に行き、その前に貼ってあるタクシー会社に電話し車を呼んだ。

タクシーを待つ間彼女は終始無言だった。僕の声は一切無視して枯葉舞うアスファルトの空間を意味ありげに、いや、もしかしたらまるで見てさえいなかったのかも知れない。

それに、僕のこと一切見なかった。

ただ無言で寒空の中に微動だにせず、軍兵のように直立不動だ。

タクシーは中々来なかった。もう30分。身体はすっかり冷え切ってしまった。僕は缶コーヒーを買い彼女に差し出した。

「寒いだろう。持ったときだよ」

「あら、ありがとう」

「女の壺を心得てるね」

「そんなんじゃないさ。ただ僕も寒かったただだよ」

「ところで、君達を救うにはあの映画を信じる限り、鏡と聖水。そして一番の難問は、君と綾女をどうやって同じ場所に肩をそろえさせるかってことなんだけど、もし綾女が意識を取り戻せば君は消える。一体どうやって君達を並んで鏡に映す？それが大問題いだ」

「考えて、きつと方法はあるはずよ。あなたならきつと出来るわ」

「そう買かぶられても困るな。でも、やるしかない事は解かっている。まずは聖水を手に入れなくちゃな」

「そうね」

「まずは教会を探してみるよ」

「そう」

「何処かにNETカフェはないかなあ」

「天文館に行けばあるんじゃない？」

「市内か？」

「そう」

「なんでそんなことを知ってる？」

「さあ、なぜかしら」

「きつと女の勘かしらね。うん。誰だっと思いつくことよね、繁華街には何でもそろってるって。そうじゃない？」

「なるほど」

「じゃあ僕は教会と聖水について調べてくるよ」

「あたしはどうすればいいの？」

「予定があるんだろう？さっき行きましょって言ったじゃないか」

「ねえ、あたしを抱きたい？」

「…えっ！！」

病院（後書き）

もし読んでいただけたなら批評、批判、感想、採点などお寄せ下さい。必ず読みますのでお願いしますm（――）m>br<この物語は前作puerJamの続編です。>br<前作を読みたい方は、砂さらるかpuerJamで検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。>br<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>br<

Mission Impossible? (前書き)

この物語は前作 *puer Jam* の続編です。

前作を読みたい方は、砂さら先生 か 小説 *Puer Jam* で
Google 検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。
<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

Mission Impossible?

「ねえ、あたしを抱きたい？」

「えっ!!」

叫ぶと同時に僕は腰を抜かして、その場に尻もちをついてしまった。

「……」

絶句。

数十秒の時間を経て、やっとのことで僕の唇は動いた。

「そういう冗談が趣味とは知らなかったな」

精いっぱい強がりだった。僕はそのまま立ち上がり、両腕で膝を抱え、タイル貼りの床の上に座り込んだ。そうしないと膝がガクガク笑っているのが彼女にばれてしまう。それほど唐突で脈絡のないセリフだった。

「じょうだん？」

「そんな冗談を言えるほど、ヒネてないつもりだけど？」

今までバッキンガム宮殿の衛兵のように、微動だにせず立ちつづけていた女性兵士はクルリときびすを返し膝を折ってしゃがんだ。

視線を完全に正面衝突させると

「どうなの？抱きたい？」

その時不意に風が起こり、彼女のスカートの黒いレースが波立つように揺れて、僕らを包んでいた陽光はさえぎられた。

タクシーが到着したのだった。

「車。来たよ」

内心ホッとした僕は彼女の視線を逃れ、やっと立ち上がることができた。

「その話題は、またにしよう」

僕は一時休戦という態で議題にあがりかけた質問の答弁を避けた。

こういう時、閣僚の気持ち解かる。世の中には答えたくても、答

えてはいけないモノゴトがあるのだ。

彼女は立ち上がった。どうやら休戦に合意していただけたらしい。
(やれやれ)

僕は心の中でため息をついた。

「天文館へ行って下さい」

運転手に告げシートに身体を沈めると、ようやく僕は「ひとこち」
つくことが出来た。

僕は思考を切り替え、綾女を救う方法の手順。それを考えることに
集中した。

A 最寄の教会を探す。

B 聖水を分けてもらう。

C 綾女の意識の無いうちにアヤメを彼女に近づける。

D 彼女達を鏡に同時に映し聖水をかける。

E AとDをあと41日以内に行う。

A については今からNET検索に向かう。

B については日本の教会にそれがあるのか？これも検索を要する。

C これが最大の問題だ。アヤメが僕の傍にいるうちに何とかしなければならぬ。

この場合、このまま綾女の意識が戻らない方が良いのだ。不謹慎だ
が最終的にそれが彼女を救う必須条件となる。

D はCの条件が揃っている前提でなおかつ、アヤメから僕が離れ
ないで居る必要がある。

可能だろうか？

E そうなのだ。今日は11/20日であり、リミットは今日を入
れて41日しかないのだ。

とにかくAから始める以外にない。

Mission Impossible? (後書き)

もし読んでいただけたなら批評、批判、感想、採点などお寄せ下さい。必ず読みますのでお願いしますm(____)m

この物語は前作 *puer Jam* の続編です。

前作を読みたい方は、砂さら先生 か 小説 *Puer Jam* で Google 検索してみてください。又は以下のURLからどうぞ。
<http://nw.ume-labo.com/dynamic/novel/a/n0493a/index.php>

LOVEHOTEL

気がつくと僕たちはラブホテルの前に着いていた。

僕はアヤメを見た。

「ここでもNETは出来るわ」

完全に誘っている。

女の娘にここまでされて欲情を抑えられるほど僕は人格者ではない。僕は諦めて彼女の誘いに乗ることのした。

「ロコ Kagoshima」

そんな名前のホテルだった。

中に入ると一番安い部屋を取った。

部屋に入るなり僕はベッドに寝転んだ。

「ハパソコンないじゃないか？」

一応先制攻撃をかけてみる。

「これはそれよりも重要事項なの」

「君と寝ることが？」

「それも最優先事項よ」

「なぜ？」

綾女があなたを愛しているから」

「だって君は分身だろう？そうすることに意味があるとは思えないけどね」

「あら、素敵だと思わない？ドッペルゲンガーとSEXするなんて、奇跡的よ？」

「そうかもしれない、それが綾女の助けになるならなんでもするさ。不条理なことでもね」

そう言い終わった時にはアヤメはもう、服を脱ぎ始めていた。とても丁寧に。奇妙に洗練された動作だった。

結局僕たちは寝た。まるで現実感のないSEXだった。皮膚への感触も実体となんら変わらない。それでもそこには現実感というもの

が欠落していた。

ものの4分程度だったろうか？それでも僕は果てた。

「さあ、任務完了しました。軍曹？」

「あんがいそつけないのね？」

「僕くらいの年齢になるとそんなに情熱的なSEXはしなくなるものなんだ」

「ふーん」

「教えてあげましょうか？」

「何を」

「あたしがあなたと寝たことで綾女はしばらくめをさまさないわ」

「何故？」

それには答えず、アヤメはさっさと服を着て

「行きましょう」

といった。僕は部屋のドアを開けて彼女を先に送り出した。レディーファーストってやつだ。

僕らは再びタクシーを止め今度こそNETカフェを目指した。

そこで検索して得た情報は2つ。

ここ、鹿児島に教会がないということ。ここは古来より日本の神々の国なのだ。

そしてもうひとつ。

キリストが生まれた時産湯につかったというヨルダン川の水が聖水としてお土産やで売られていて、NETショッピングで買えるという事だった。

僕はとりあえず高瀬宅の住所で買っておいた。

こういうものは何が役立つかわからないからだ。

それを持って教会に行き改めて清めてもらえば完全だろう。

何故かわ判らないが直感的にそう思ったのだ。

「長崎に有名な教会があるわ」

となりで検索していたアヤメが声をかけてきた。

僕は手帳に住所と電話番号をメモした。

次の目的地は決まった。

それにしても、便利な時代になった。こんな極東の田舎町からでも世界中の情報が手に入る。10数年前には予想もつかなかったことだ。この際、時間は金塊よりも貴重だ。短時間で情報を入手できたことを僕はありがたく思った。

リフレインが叫んでる（前書き）

アクセスありがとうございます。できましたら、そのままお読みいただければ とても嬉しく思います。

なんとか恋愛小説らしく話を戻すのに手間取ってしまい、およそ7ヶ月ぶりの更新です。

全文字数3874文字。

たったこれだけ書くのに11時間かかりました。

（^^;）

続きの更新は未定ですが、あらすじは出来ているので時間さえ作ればそう遠くない日にUPできると思います。

今後とも宜しくお願いします。

リフレインが叫んでる

「長崎か」

僕は時計を見た。午後3時25分。

今から向かっても夜になるだろう。明朝出発の方が良いなと思う。そこで気づいたのだが、アヤメはどうする？

一応彼女は物理的に存在しているのだけれど、いつ消えてしまうか判らない。

そう。この春の映画館で突然消えてしまった様に。

病院に居る綾女が意識を取り戻せば、ここにいるアヤメは消えてしまふのだ。

「あたしがあなたと寝たことで綾女はしばらくめをさまさないわ」
そうアヤメは言った。

そのために僕と寝たのだ。それが本当かどうか確かめる術は僕には無かった。

だとしたら彼女を信じるほかは無。

一緒に居た方がいいのだが…

「何してるのよ？」

PCの画面を虚ろに見ている僕にアヤメの声が飛んできた。
我に返るとアヤメはすでに店の出口に向かって歩いていて。

僕はアヤメを追い声をかけた。

「何処へ行くんだ？」

「長崎でしょ？」

こともなげに言う。

「それはもちろんだけど、今から？ 夜になっちゃうよ」

「夜だとかいけないことでもあるの？」

何をイラだっているのだろう。

「だって閉まってるんじゃないか？」

「気になるなら訊いてみれば？ 電話で」

「ああそうか…」

うつかりしていた。

すぐに電話をかけると年配らしい女性の声が聞こえた。

聖水を分けていただきたいのだが、夜に伺ってもいいかと訊ねると9時頃までなら開けているとのことだった。

「9時までなら行って良いそうだ」

僕の声は自動ドアに向かって虚しく響いた。

アヤメは店を出た後だった。

やれやれ。

彼女は本当にあの綾女の分身なんだろうか。ずいぶんと活発で行動的だ。

アヤメを見ていると全く普通の人間で、ドッペルゲンガーなどという得体の知れない存在だとは思えない。

逆に病院で昏睡している綾女の方が希薄な存在じゃないかと。

そう思っ僕は自分の浅はかさに驚いた。

綾女が存在が希薄に思えるのは、それだけ彼女の生命が弱っているということではないのか？

もしかすると アヤメが活発であればあるほど、本体である綾女は消耗していくのではないだろうか？

僕の中でアヤメの声が反響していた。

『今年一杯に実現させなければタイムオーバー…』

僕はある考えに行き着いて焦りはじめていた。

そして後悔。

『あたしがあなたと寝たことで綾女はしばらくめをさまさないわ』
そういうことだったのか！

アヤメが活動すれば綾女は疲れるのだ。だから消耗する。

そして目覚められない！

ウカツと言っこれほどウカツなことは無い。

僕は僕自身の手で綾女の生命を削ってしまったのだ。

そう思った瞬間、僕は前を歩くアヤメの肩を左手でつかんだ。

「綾女は後何日もつんだ!？」

「まさか期間が短くなつたんじゃないだろうな!？」

強い口調になっていた。

アヤメが答える。

「それはわからないわ でも急いだ方が良いのは確かよ」

「さつき何故僕を誘つた!？」

「あら、わからない？」

「僕を騙したのか？」

肩をつかんだ手に力がこもる。

「騙す? ねえアナタあたしが綾女の一部だつてこと忘れてない?

あたしはあたし達が生きるためにここに居るのよ？」

「しかし君は僕と寝た そして綾女はしばらく目覚めないと言つた」

「ええ」

「目覚められないんだろ? 違うか？」

「気がついたみたいね」

「知っていたのか？」

「自分のことだもの 当然でしょ? それが必要だつたのはアナタにも解かつてるでしょ？」

そこまで話して僕は一気に虚脱感に包まれた。

僕は大力野郎だ!

何故もつと早く気づかなかつた? 気づくべきだったのに。

自分を呪つた。

しかしもう仕方がない。事件は起こってしまった。明らかに僕自身の過失だつた。

とにかく早くアヤメと綾女を元通りひとつの存在に戻さなくては、綾女が死んでしまう。

アヤメも消えてしまうのだ。

タイムリミットはあと40日と数時間。

ここは行動するしかない。

「判った」

それだけいうと僕はアヤメの肩から手を離れた。

「とにかく僕は出来ることをする　君達と僕自身のために」

アヤメは微笑んで言った。

「ありがとう　アナタに逢えてやっぱり良かったわ」

アヤメは続けて。

「あたしアナタが好きよ」

思ってもいない台詞に驚いた。唐突に何を言い出すんだ？

と感じたが素直に答えた方がいい。そう思った。

「光荣だよ　けど徹君に悪いような気がする」

さつきまでの荒立った感情は消えていた。

どちらかと言えば、親密な空気の中に僕達は居た。

「君は徹君のことを憶えてる？」

「もちろんよ」

「ねえ　僕は君と綾女とが別の存在に思えて仕方ないんだ」

「君は綾女とソックリな全くの別人で、けれど彼女の親友みたいな

そんな風を感じるんだ」

アヤメは黙っている。

「だから訊きたいんだけど僕を好きになってくれたのは綾女なのか
な？」

「あたしの感情は　綾女の感情よ　あたしは綾女が実体化し
た存在だもの」

アヤメはわずかだが目を伏せた。いくぶん悲しそうな表情に見える。

「君はそれを自覚してるんだよね」

アヤメは黙ってうなづく。

「だとしたら綾女は君の行動を憶えているんだろうか？」

「それはあたしにも分からない　綾女が目覚めている時はあたしは

存在しないもん」

今度は間違いなく悲しい顔をした。

それで僕は何か胸がキュンと萎むような気がした。

「でも綾女は君を見たことがあるんだよね？ きみはそう言っただろう？」

アヤメは黙ってうなずいている。

「綾女も、そう デイズニールランドで初めて逢った時君のことを分る身だと言ってた」

「そう」

語尾を下げてアヤメが言う。

「うん だから君達が元通りひとつに戻ったら、綾女は君と僕と一緒に居た時のことを記憶してると思うんだ」

「例えば今この時のことをさ」

少しの沈黙の後

「そうね きつと憶えていると思うわ」

「だって、あたしはアナタのこと忘れたくないもの」

そう言っただけと振りかえって僕の目を見つめた。

その目がこころなしか潤んでいた。

「僕は忘れない」

「えっ？」

「僕は君が存在していたことを忘れない 絶対にだ」

僕は自分でも驚くような台詞を言った。しかしそれは、本心に違いはなかった。

アヤメはかすかに震えていた。僕を見つめていた目を、ひととき大きく見開いて。

そのときその見開かれた目から透明な光が雫となってこぼれはじめた。

「ありがとう」

その声も小さく震えていた。

震えながら立ち止まって僕の腕を両手でつかんだ。

「あたしがアナタに触れられるのは今だけなのよ…」

僕は意味がつかめなかったがアヤメがあまりに悲しそうなのでただうなずいた。

「いつ消えてしまうかは あたしには分からない」

「だからアナタと一瞬でも長く居たいと思ったのよ、死んじゃっても構わないって そう思ったの」

「死なせない」

僕は静かに、けれど力強く言った。

「君はきつと僕が助ける 自信はないけど…」

「でも、きつと助けるよ 死なせない」

アヤメはうつむいて、そして小さな声で言った。

「もし助けてくれても綾女は… あたしは… アナタを憶えていなか
いかも知れないのよ」

「でも僕は忘れない」

もう一度静かに言った。

その言葉には自信があった。決して忘れるものか。

僕の腕をつかんでいた腕が今度は背中に巻きついた。

僕も同じように彼女の背に腕を回した。

つい一時間ほど前のホテルに居た時とはまるで違って、アヤメはと
てもリアルだった。

そこには確かな感情と体温が感じて取れた。

僕らは互いの存在を確かめるようにしっかりと抱きしめ合った。

まるで、違う時空に吸い込まれるのに抗うように。

そして僕の腕の中に居るのは綾女だった。

今アヤメと綾女はシンクロしている。確かに僕はそれを感じていた。
そして確信に近いものが生まれた。

彼女達は元に戻る。と。

僕はいつそう強く彼女の体を抱きしめた。

その時だ。

急にアヤメが萎んでいくような感覚があった。

「！」

今までそこに在ったはずのアヤメの体が、触覚を刺激しなくなった。空気のよう。目には見えるのだがまるで映像のようだ。

アヤメは慌てた表情になって叫んだ。

「今度逢ったらもう最後かも知れない！ もう逢えないかもしれないの！」

咄嗟に僕は答えた。

「大丈夫だ安心しろ！ 必ず元に戻る！」

映像が色を失い始める。

僕は悟った。

綾女の意識が戻り始めたのだ。

アヤメは近くのビルの陰に向かって走り出す。

僕も続いて走った。

ほんの数秒のことだったはずだが、人目に着きにくいビルの陰に駆け込むと同時にアヤメは消えてしまった。消える直前にもう一度叫んだ声を残して。

「次は最後かも知れな…！」

僕は半ば呆然とアヤメが消えたビルの陰に立ち尽くしていた。

無意識に胸を手が押さえた。

急に走って息が乱れたせいだ。

その手がひんやりと冷たかった。

見ると僕の胸の辺りは、光の雫が染み込んで濡れていた。

僕は両手でその濡れ具合を確かめた。

それはまぎれもない現実で、アヤメが物理的に存在した証だった。

だってそうだろう？

いくらリアルに感じても存在しない者が涙を残せるはずがないのだから。

僕は片手の掌を胸に当てたまま再び歩き始めた。

南国といえども冬の陽は短い。

いつしか夜の気配がただよい始めている街中を、僕は独り駅に向かった。

胸の中に、アヤメの声がリフレインしていた。

リフレインが叫んでる（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

宜しければ、ご意見ご感想をコメント欄にお残しいただければ幸いです。

つまらない。の一言でも結構ですので。よろしくお願いします。

そして僕は途方に暮れる（前書き）

大した展開はないのですが、3度書き直して徹底的に文章を減らしましたので、読みやすくなっていると思います。

もう少し書き進めてから投稿しようと思いましたが、最近アクセスが多いので、もし待つてくださっていたら申し訳ないと思ひなおりて投稿しました。次も可能な限り努力しますので宜しくお願いします。

そして僕は途方に暮れる

困ったことになった。

と思ったのは、ずっと後になってのことだ。

「どうした？ 人生に驚いたり慌てたりするようなことはなにもないぞ？」

と云うのは、僕の好きな小説の中の台詞だが、実を言えば僕はかなり気が動転していた。

（もっともその人物は台詞の後、大いに驚くのだが…これは余談だ）

ここ数年の僕は 鬱に陥って引きこもったり、眠剤や安定剤で呆としたり酔っ払っていたり。

そんな生活が続いていたのだ。

思えば感動と云うか感情薄い人間だった。これほど活動的になったのも久しぶりだ。

だから僕は今、気が動転していることを喜ぶべきかもしれない。

それにしても。

何故突然に綾女が目覚めたのだろう。

アヤメはしばらくは目覚めないと言っていたし、僕も理由に気づいてからはそうに違いはないと思った。

僕は病院に電話をして訊ねてみた。若いナースだ。

「意識は戻ったでしょうか？」

もしかしたら。

もうアヤメとひとつになって、以前の記憶も取り戻していないだろう

うか？出できればアヤメの記憶も一緒にであればいい。

僕は勝手な希望を抱いていた。

しかし間を置かず彼女は

「いいえ まだ…」

と答えた。

僕は

（そんなはずはない）

と、口を開きかけたが思いとどまった。

他人に話して解かる話ではない。

礼を言つて僕は携帯を切った。

予想外だ。全くもって予想外だ。

綾女の意識が戻ったのでなければ何故？

電話の前と疑問が変わってしまった。

何故アヤメは消えたのだろうか？

僕にそれが判るはずもなかった。

判ったことは事態が悪化したということだけだ。それも最悪の事態だ。

困ったことになった。

「君はきつと僕が助ける」

と言った。

「きつと助けるよ 死なせない」
とも言った。

だがこんな風に事態が変わるとは……
なんだってこんなに良くない方へばかり変わるんだ！

みつともない話だが、行き詰まると酒が欲しくなる。

逃げ癖と言われても仕方ないが、僕はそんなに出来が良くない。
酒ぐらい可愛いものだと許してもらいたい。

それに空腹でもあった。朝からなにも入れてない。

今日は色々あり過ぎた。

これからまだまだやることなすことがあるのだ。何をすれば良いかはまだ分らないが、戦士には休息も必要だ。

駅までもう少しのはずだったが、僕はちょうど目についた小さなレストランらしい店のドアを開けて 階段を降りた。

店に入るなり、その異様な空気にひるんでしまった。

壁一面に飾られた仮面。おびただしい数だ。

そのどれもがこの世のものではない顔をしている。

外観からは想像の難しい異世界だった。

席に案内されメニューを開くと、覚えのあるものがあった。

どうやらここはバリ料理の店らしい。

「ARAKとナシゴレンを」

と注文した。

アラックは有名なバリの酒だ。

ウイスキー並みの強さのある蒸留酒で、癖が強いが嫌いな味ではなかったと覚えている。

ナシゴレンは確か焼き飯だったと思う。

ほどなく見覚えのあるグリーンのボトルが運ばれてきた。
さつそく煽るようにロックで飲み始める。

（綾女 必ずなんとかするからまだ死ぬなよ）

飲みながらも胸の中には、そんな思いがくすぶっている。
久しぶりのアルコールに5分と待たず酔いが回ってきた。

スピーカーから流れているのは、ケチャ（またはケチャック）と言

われる祭事音楽だ。

なにか香を焚いているらしく馴染みのない香りが漂っている。
チャクチャクチャクチャクと数十人分の声が、太鼓にあわせて叫ぶように甲高く唱和されている。

ガムランが不思議な音階をたどり、手拍子がやはり数十人でリズムをきざんでいく。

まだ2杯も空けてないはずだと思ったがARAKがトランキライザーとなり、僕はケチャのリズムに呑み込まれる。

それが何らかの作用をし始め、視界がゆらりゆらりと陽炎のように揺れ 光はにじみだす。

やがて揺れは渦のように、トンネルのように歪む。

カレイドスコープ。水万華鏡のようだ。

音楽はどんどん速くなり、そして音は大きくなって ついに世界を包み込んでしまった。

もう世界には、ワヤンの祭りとかチャシかないのだと言っくらい音が大きく響きその瞬間 一斉に止んだ。

そして僕は途方に暮れる（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

なにかご意見ご指摘がございましたら、コメント欄へ書きこみただければ幸いです。

次話も宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1253a/>

Love begins with Internet

2010年10月13日17時45分発行